Think globally, Act locally

2019
10.13-10.20

India

文部科学省委託 2019 年度初等中等教職員国際交流事業

インド教職員招へいプログラム　実施報告書

ACCU　公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

文部科学省委託 2019 年度初等中等教職員国際交流事業

インド教職員招へいプログラム
実施報告書

東京都・千葉県

2019 年 10 月 13 日(日) ― 10 月 20 日(日)

公益財団法人ユネスコ･アジア文化センター （ＡＣＣＵ）

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO：ACCU）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において地域協力・交流活動を推進しています。ユネスコ憲章の「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」という言葉に沿い、ACCU はその活動の一つとして、アジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的に、未来を担う多くの子供に影響力を持つ「教職員」を対象とした国際交流事業を、日本政府および国際連合大学の協力のもと、2001 年より開始しました。この教職員国際教育交流事業は、日本と韓国、中国、タイおよびインドとの間で行われ、これまでに約 4 千人の海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは約 1 千人の教職員を海外に派遣してきました。これにより、日韓・日中・日泰・日印間で、多くの教職員間交流および学校間交流が生まれ、これらの国々の相互理解と友好の増進に大きく貢献してまいりました。

日印間の国際交流事業としては、2016 年から国際連合大学の主催する国際教育交流事業の一環として、文部科学省、インド連邦政府人的資源開発省（Ministry of Human Resource Development：MHRD）、インド環境教育センター（Centre for Environment Education：CEE）の協力のもと「インド教職員招へいプログラム」が始まり、2018 年度までに 43 名のインド教職員を本邦に招へいしました。第 4 回となる今回のプログラムは、文部科学省委託事業「2019 年度初等中等教職員国際交流事業」の一環として、2019 年 10 月 13 日から 20 日まで、インドの小・中・高等学校の現職教職員等 12 名を日本に招へいしました。参加者は、日本の初等中等教育についての講義、学校や文化施設の訪問、日本教職員との交流会等を通して、日本の教育や文化についての理解を深めるとともに、平和で持続可能な社会に向けた教育の実践例を学び合い、相互理解と友好促進に貢献しました。

実施にあたりましては、文部科学省、インド連邦政府人的資源開発省、インド環境教育センター、訪問先の学校、その他教育・文化機関等、多くの方々の多大なるご支援とご協力をいただきました。ここにあらためて、関係の皆様方に厚く御礼申し上げます。

2020 年 2 月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

目　次

１．プログラム概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

２．実施内容・訪問記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

３．コメントと提案・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

インド教職員・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

受入機関・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

事業担当者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37

付録

文部科学省講義資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

インド教職員によるプログラム報告・・・・・・・・・・・・・・・・・57

過去のプログラム実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70

１．プログラム概要

プログラム概要

1. 実施の背景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、教育と文化の分野において地域協力・交流活動を推進しています。ユネスコ憲章の「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」という言葉に沿い、ACCU はその活動の一つとして、アジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的に、未来を担う多くの子供に影響力を持つ「教職員」を対象とした国際交流事業を 2001 年より開始しました。

日本とインドとの間の国際交流事業としては、2016 年より「インド教職員招へいプログラム」が文部科学省、インド連邦政府人的資源開発省（MHRD）、インド環境教育センター（CEE）の協力のもとで始まりました。第 4 回となる今年度は、2019 年 10 月 13 日（日）から 20 日（日）までの 8 日間に渡り、インド共和国から初等中等教育教職員 12 名を本邦に招へいします。

2. 目的

本プログラムの目的は、プログラム中の活動を通じて、教職員が相手国に対する理解を深めると共にお互いに学び合い、相手国の教職員や児童・生徒との相互理解と友好を促進し、教職員間のネットワークを構築・強化することです。また、プログラム終了後には、教職員が自身の学びを教育現場において児童・生徒・教職員・地域住民等に伝え、国際理解教育、平和教育、ESD（持続可能な開発のための教育）、GCED（地球市民教育）等を含めた「持続可能な社会に向けた教育」を推進する担い手となり、ひいては日印間の相互理解と友好の促進、そして平和で持続可能な世界の実現に繋がることを目指しています。

3. 期待される成果

・プログラムからの学びを児童・生徒・教職員・地域住民等に伝える。
・プログラム中にネットワークを構築した日本やインドの教職員と持続的な交流を行う。
・教育現場において日本やその他の国との国際交流を行う。
・国際理解教育、平和教育、ESD、GCED 等の平和で持続可能な社会に向けた教育を推進する。

4. 活動内容

・学校等の訪問（授業見学、教職員・児童生徒との交流、国際理解教育・平和教育・ESD の視察等）
・日本の教職員との意見交換
・文化施設の視察
・日本の教育制度や関連事項についての講義受講

5. 日程

日付	日程	訪問先	活動
10 月 13 日（日）	第 1 日	デリー	デリー出発
10 月 14 日（月）	第 2 日	千葉県 東京都	日本到着 オリエンテーション

10 月 15 日（火） ｜ 10 月 17 日（木）	第 3-5 日	東京都 千葉県	文部科学省表敬訪問、講義 学校訪問
10 月 18 日（金）	第 6 日	東京都	文化施設訪問
10 月 19 日（土）	第 7 日	東京都	日印教職員交流会 報告会・閉会式
10 月 20 日（日）	第 8 日	千葉県 デリー	日本出発 デリー着

6.参加者数

初等中等教職員 12 名（MHRD および CEE の職員各 1 名を含む）

7. 参加資格

(1) 国際理解教育、平和教育、ESD、GCED 等の持続可能な社会に向けた教育に携わっている、または高い関心を持っており、帰国後はそれらの推進に寄与できる者。
(2) 所属する学校等からの推薦を受けた、インドの初等中等教育またはノンフォーマル教育センターの教職員（教育行政官及び教育専門家を含む）であること。（なお、45 歳以下で教員経験 3 年以上の者が好ましい）
(3) 英語での会話が可能であること。
(4) 健康で、プログラムの全日程に参加が可能であること。
(5) インド共和国の国籍を有すること。

8. 渡航費等

ACCU は下記の経費を負担する。（※下記以外の経費は参加者が負担することとする。）

(1) 往復航空運賃
インド国内の指定された国際空港と、日本国内の指定された国際空港との間のエコノミークラス航空券。
(2) 宿泊と食事
プログラム期間中の宿泊（朝食含）、およびプログラム期間中の食事。
（食事が提供されない場合については食費を支給する。）
(3) 日本国内の移動旅費
プログラム期間中の、自由行動時以外の国内移動旅費。

9. 海外旅行傷害保険

各参加者は、プログラム期間中に起こりうる傷害、疾病等の緊急時に備えて、各自の責任において、必ず海外旅行傷害保険に加入すること。

10. 通訳

プログラム期間中は原則として日本語と英語間の逐次通訳が行われる。

プログラム日程

日にち	時間	内容	宿泊先
10 月 13 日(日)	21:25	デリー－成田（AI306）	機中泊
10 月 14 日(月)	08:45	成田国際空港到着	ホテルヴィラフォンテーヌ東京九段下 〒101-0065 東京都千代田区 西神田 2-4-4 Tel: 03-3222-8880
	12:30-13:30	昼食	
	13:00-14:00	オリエンテーション（在日本国インド大使館にて）	
	14:45	ホテル到着、チェックイン	
10 月 15 日(火)	09:20	ホテル出発	
	10:00-12:00	文部科学省表敬訪問・講義	
	12:30-13:30	昼食	
	13:30-17:00	文化・教育施設訪問(明治神宮、渋谷エリア、国連大学)	
	17:30	ホテル到着	
10 月 16 日(水)	08:15	ホテル出発	
	09:30-14:10	松戸国際高校訪問	
	14:10-15:00	インド教員による会議	
	16:15	ホテル到着	
10 月 17 日(木)	08:00	チェックアウト、ホテル出発	
	9:00-13:35	府中市立第三小学校訪問	
	13:35-18:00	府中市立第三中学校訪問	
	19:00	ホテル到着、夕食	
10 月 18 日(金)	08:45	チェックアウト、ホテル出発	
	09:00-11:00	インド教職員による会議(ACCU 事務所にて)	
	11:00-12:00	昼食	
	12:00-18:00	文化・教育施設訪問(東京国立博物館、浅草、お台場)	
	18:00-19:30	夕食	
	20:00	ホテル到着	
10 月 19 日(土)	09:00	ホテル出発	
	10:00-17:15	日印教員交流会、報告会&閉会式（JICA 地球ひろばにて）	
	18:00	ホテル到着	
10 月 20 日(日)	07:30	チェックアウト、ホテル出発	
	09:00	成田国際空港到着	
	11:15	成田－デリー（AI307）	
	17:00	デリー到着	

参加者リスト

No.	氏名	所属	職名	科目
I-01	Santosh Raghunath Sutar	Centre for Environment Education	Regional Director	環境教育
I-02	Anil Gairola	Ministry of Human Resource Development, Department of School Education &Literacy	Under Secretary to the govt.	－
I-03	Rongneisong Risoreng Koireng	National Council Education Research and Training, Department of Curriculum Studies	Associate Professor	教師指導員
I-04	Chandana Bania	Central Tibetan Schools Administration, Shimla	Teacher	英語
I-05	Manjeet Singh	Central Tibetan Schools Administration, Herbertpur	Teacher	地理
I-06	Santosh Kumar Chaurasia	Navodaya Vidyalaya Samiti, Jawahar Navodaya Vidyalayas, Alirajpur	Teacher	科学
I-07	Anita Kanwar	Navodaya Vidyalaya Samiti, Jawahar Navodaya Vidyalayas, Sirmour	Teacher	地理
I-08	Preeti Shrivastava	Kendriya Vidyalaya Sangthan, ONGC Ankleshwar, Ahmedabad Region	Teacher	英語基礎
I-09	Manish Kumar Pandey	Kendriya Vidyalaya Sangthan, Mughalsarai, Varanasi Region	Teacher	社会科学
I-10	Mary Sorna Rani Daniel	Central Board of Secondary Education, Bhavans Adarsha Vidyalaya, Kakkanad	Teacher	科学・化学
I-11	Sonia Chhabra	Central Board of Secondary Education, Bal Bharati Public School, Pitampura	Vice Principal	英語
I-12	Poonam Dua	Central Board of Secondary Education, Delhi Public School	Teacher	生物

プログラム関係機関

Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology（MEXT）／文部科学省

3-2-2 Kasumigaseki, Chiyoda-ku, Tokyo 100-8959
〒100-8959　東京都千代田区霞ヶ関 3 丁目 2 番 2 号
TEL: +81-3-5253-4111　　URL: http://www.mext.go.jp

Mr. NARA Satoshi
Director, International Affairs Division, Minister's Secretariat
奈良　哲
大臣官房国際課　課長

Mr. ARAI Tadayuki
Senior Specialist for Bilateral Education Cooperation, International Affairs Division, Minister's Secretariat
荒井 忠行
大臣官房国際課 海外協力官

Ms. YONEOKA Aiko
Unit Chief, Office for International Strategy Planning, International Affairs Division, Minister's Secretariat
米岡 亜依子
大臣官房国際課 国際戦略企画室 海外協力政策係長

Embassy of India ／インド大使館

2-2-11 Kudan-Minami, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0074
〒102-0074　東京都千代田区九段南 2-2-11
TEL: +81-3-3262-8520　　URL: http://www.indembassy-tokyo.gov.in/home.html

Mr. Bramha Kumar
Counsellor (Political & IEC)
ブラムハ　クマール
参事官（政治＆情報･教育･文化）

Mr. Karan Yadav
Second Secretary (Political & IEC)
カラン・ヤダフ
二等書記官（政治＆情報･教育･文化）

学校訪問でご協力いただいた方々

千葉県立松戸国際高等学校

〒270-2218 千葉県松戸市五香西 5-6-1

TEL: 047-386-0563

URL: http://cms1.chiba-c.ed.jp/matsudokokusai-h/

加茂　進	中原　章子
校長	教諭

府中市立府中第三小学校

〒183-0021 東京都府中市片町 3-5

TEL:042-361-9003

URL: http://www.fuchu03s.fuchu-tokyo.ed.jp

宇都宮　聡	吹越　菜央
校長	主任教諭

府中市立府中第三中学校

〒183-0027　東京都府中市本町 4-16-10

TEL: 042-361-9303

URL: http://www.fuchu03c.fuchu-tokyo.ed.jp/

高岡　麻美	高原　一晃
校長	主幹教諭

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO（ACCU）／
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

1-32-7F, Kanda Jimbocho, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0051 Japan
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル
TEL: 03-5577-2853　　FAX: 03-5577-2854
Email: accu-exchange_ml@accu.or.jp　　URL: http://www.accu.or.jp

Mr. TAMURA Tetsuo
Director-General
田村　哲夫
理事長

Ms. SHINDO Yumi
Director, International Educational Exchange Department
進藤　由美
国際教育交流部　部長

Ms. FUJISAWA Yayoi (main person in charge of programme)
Programme Officer, International Educational Exchange Department
藤澤　弥生（本プログラム主担当）
国際教育交流部　プログラム・オフィサー

Ms. TAKAMATSU Ayano (vice person in charge of programme)
Programme Specialist, International Educational Exchange Department
高松　彩乃（本プログラム副担当）
国際教育交流部　プログラム・スペシャリスト

Mr. OKANO Koichi
Programme Specialist, International Educational Exchange Department
岡野　晃一
国際教育交流部　プログラム・スペシャリスト

Ms. ITO Tae
Programme Specialist, International Educational Exchange Department
伊藤　妙恵
国際教育交流部　プログラム・スペシャリスト

Ms. TEMMA Mika
Programme Officer,
International Educational Exchange Department
天満　実嘉
国際教育交流部　事務専門員

２．実施内容・訪問記録

10 月 14 日（月）オリエンテーション（東京都）

インド大使館での集合写真

訪問団は 2019 年 10 月 13 日の夜にデリーを出発し、翌日 14 日の朝に成田へ到着した。到着後は、まず公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）によるオリエンテーションを受け、プログラム日程、滞在中の注意事項、ACCU スタッフの紹介等の説明を受けた。今回のオリエンテーションも昨年度に引き続き、在日インド大使館の協力により、東京都九段下にある大使館にて行われた。オリエンテーションでは、在日インド大使館の参事官（政治＆情報・教育・文化分野）であるブラムハ・クマール氏と、二等書記官のカラン・ヤダフ氏から訪問団に向けて挨拶があり、プログラム参加に向けてのアドバイス等もいただいた。

10 月 15 日（火）文部科学省表敬訪問（東京都）

日本の初等中等教育の概要に関する講義

文部科学省の表敬訪問では、はじめに大臣官房国際課・海外協力官の荒井忠行氏が挨拶をし、文部科学省で行われる講義を通して日本とインドの教育制度の違いについて考え、プログラム中の学校視察に活かし、インドに戻った後は訪日の経験を学校で紹介し、日本とインドの交流の架け橋となっていただきたいと述べた。

続いて、国際統括官付・ユネスコ振興推進係長の福本倫氏より、持続可能な社会のための教育（ESD）に関する講義が行われ、ESD の背景、概念、国家カリキュラムにおける位置づけ、学校での実施事例、コンソーシアム、大学間ネットワーク等について説明した。

ESD に関する講義の後は、日本の初等中等教育の概要に関する講義が行われ、初等中等教育局・企画官の桐生崇氏、および総合教育政策局教育人材政策課・課長補佐の赤間圭祐氏から、日本の学校体系、教育行政、日本の教育の特徴、学習指導要領の変遷、教員養成、等について説明があった。講義後の質疑応答の時間には、下記のとおり訪問団から様々な質問が聞かれた。

Q&A より（抜粋）

Q： ユネスコスクールになるメリットは何か？
A： ネットワークに入ることで他校の実践を共有してもらうことができる。

Q： Microsoft 社なども CSR として SDGs に取り組んでいるが、日本の状況はどうか？
A： 日本の課題として企業と学校のコラボがあまり進んでいないという点はある。

Q： 日本では高校において探求的な学習は行うか？
A： 高校では探求的な学びを意識しており、既にわかっていることではなく、科目としては無いような内容で社会課題等などについて学ぶ学習を行っている。

Q： PISA のための学習の時間はあるか？
A： PISA のためだけの学習の時間は無く、PISA の考え方を取り込んで PISA に対応できる形で授業を行っている。

Q：日本の教育制度では国レベルのカリキュラムはどのように扱われているのか？
A： 政府が策定する国レベルのカリキュラムとしての学習指導要領はあるが、学校で実際に教える内容には柔軟性がある。教科書も学習指導要領に基づいた教科書が複数作られ、政府が検定を行い、自治体が選定するという形になっている。

Q： 日本の教育政策の責任は誰にあるのか？インドでは教育政策は中央政府が定めているが、自治体でも法律を作ることができる。
A： 基本的な政策は政府が決め、地方自治体では国の方針に基づいた教育計画を立てている。なお、教科書選定・教員採用・人事・予算については地方自治体の責任とされている。

Q： 教員養成の内容は各教育レベルで同じか？
A： 学習指導要領が教育レベルによって異なるため、教員養成の内容は教育レベルによって異なる。教員養成課程は 4 年制大学で 4 年間かけて学ぶことになる。

Q： 教職員はキャリアの中でどのくらい研修を受けるのか？
A： 義務的な研修は 2 つあり、初任者研修と 10 年目の研修がある。その他の研修もあるが、それについては都道府県が決めている。

Q： 教員採用はどのように行われるのか？
A： 教員免許は国のものだが国家試験ではなく、教員採用は県が行っている。

10 月 15 日（火）文化・教育施設訪問（東京都）

明治神宮を参拝

手水を体験

国連大学前にて集合写真

文部科学省の表敬訪問を終えた後、訪問団は文化・教育施設の訪問として、明治神宮・渋谷原宿エリア・国連大学本部を見学した。

渋谷で昼食を取った訪問団は、ハチ公像やスクランブル交差点を通り、渋谷の街並みを見学しながら明治神宮へ向かった。明治神宮では、明治神宮の歴史や日本の宗教としての神道に関する説明をガイドさんから受け、神社の参拝作法についても教えてもらうと、訪問団は一人一人手水をし、本殿前でもお賽銭を入れて熱心にお祈りをした。明治神宮では、七五三の衣装を着た子供たちに出会い、その可愛らしさに感激して一緒に記念写真を撮らせてもらったり、逆にインドの色鮮やかな民族衣装姿の訪問団と一緒に写真を撮らせて欲しいという和装姿の日本人の方もいて、民族衣装という共通点で思いがけない交流ができた。

その後、徒歩で原宿の竹下通りと表参道を通り、日本の大衆文化スポットである原宿エリアの様子を見学しながら、青山エリアにある国連大学本部へ向かった。国連大学本部は、地球規模課題の解決に取り組むことを目的に、大学や研究機関と連携して共同研究や教育を行っており、国際的な学術機関や国連システム組織との架け橋としての役割を担っている機関である。訪問団は国連大学のこのような役割や歴史等について説明を受け、大学前で記念写真を撮ってこの日は終了した。

10 月 16 日（水）千葉県立松戸国際高校（千葉県）

訪問スケジュール

時間	内容
9:35-9:55	挨拶、記念品交換
9:55-10:25	学校概要説明
10:45-11:35	授業参観・校舎見学
11:45-12:35	インド教職員による授業
12:35-13:20	昼食
13:20-14:10	教職員との意見交換会

日印関係について授業を行うインド教職員

学校の特色、特記事項

同校は国際化社会に対応できる人材を目指し、外国人・帰国生徒等の受け入れと共に国際教養科を設けて国際理解教育や英語教育に力を入れており、地球規模課題の解決に向けて自ら考え動く「社会力」を持つ生徒の育成を学校全体として取り組んでいる。

訪問当日は、挨拶と記念品交換の後、図書館や合宿施設等の学校施設を見学し、その後、美術・調理実習（わらび餅）・被服（ゆかた作り）・書道・日本文化（能）などの授業を見学した。国際教養科 3 年生の授業では、日本の生徒とインド教職員が英語で会話をする機会もあり、訪問団は日本の生徒との自由な会話を大変楽しんだ。また、インド教職員が日本の生徒に授業をする機会もあり、インドの宗教・日印関係・インド式数学について日本の生徒に教えた。授業の途中には、リラックスタイムとしてヨガと呼吸法で精神を整えるというインドを感じられる時間もあった。昼食時は、家庭科部とボランティア部の生徒たちが同席し、生徒から手作りのどら焼きや折り鶴のプレゼントもあり、大変暖かい歓迎を受けた。訪問の最後に行われた日本人教職員との質疑応答の時間では、学校経営や指導等に関してインド教職員から実に多くの質問があり、充実した議論が行われた。校長先生からは、インドの良いところを吸収するために日本からも是非インドの学校を訪問したいというコメントもあった。

教室にて生徒と直接英語で会話

昼食時の生徒との交流の様子

Q&A より（抜粋）

Q：学校運営の秘訣は？

A：日本人は協力して何かをする力をもっていて、校長の立てた方針に沿って先生方が協力して動いてくれていることでうまくいっていると思う。また、良い生徒たちが学校を選んで来てくれるので学校が良くなっているし、良い学校でなければ生徒が来なくなるとも言える。良い学校経営と良い生徒が良い循環を生み出しているのだと思う。

Q：学校で秩序を維持するための対策は？問題のある生徒にはどのように対応しているか？

A：日本の高校には色々な生徒がいるが、本校の生徒は先生の言う事をよく聞く生徒が多く、校則に従って行動している。校則では「〇〇を禁止する」という言い方ではなく、「〇〇を厳かに慎む」という言い方をしており、厳しく縛っておらず、生徒は自主的に考えてやっていい事と悪い事を自分で判断している。

Q：学校にとって一番の課題は何か？

A：学校のコンセプトとして、グローバルな世界をけん引する人材育成というのがあるが、グローバルな人材とは単に英語ができるということではなく、人との関わりの中で社会に貢献できる社会力を持ち合わせた人材であり、これからの社会では個人の力ではなく皆の力で課題を解決することが必要となると考える。

Q：科目編成について知りたい。

A：国の定めた最低基準に基づく必修科目と自由選択科目で成り立っている。文系科目に関心が高い生徒が多いが、語学力に加えて理数の能力があれば活躍できると考えるため、理系科目にも力を入れ、関心を持ってもらいたいと思っている。

Q：教科書は学校単位で選ぶのか、それとも教師が選ぶのか？

A：教科書は各教科単位で選んでおり、教師によって使う教科書が違うということはない。教科書は文部科学省が検定をした教科書を使うことになっており、検定を通った教科書は１つの教科で複数あるので、その中から選んで使っている。

Q：学校でのメンタル面のケアや進路指導のサポートはあるか？

A：思春期の問題については各学年に担当の先生がいるほか、保健室で心の問題へのケアも行っている。進路指導については進路指導部があり、専用の部屋もある。

10 月 17 日（木）府中市立府中第三小学校（東京都）

訪問スケジュール

時間	内容
9:15-9:40	挨拶、記念品交換、学校説明
10:00-10:20	歓迎集会
10:45-12:20	授業見学・特別支援教室見学
12:20-13:00	昼食交流
13:00-13:35	質疑応答

校長先生による学校説明

学校の特色、特記事項

同校は 1953 年に創立した長い歴史と伝統を有する公立の小学校であり、近隣大学の協力を得て留学生を呼んだ授業をしたり、1 年生から英語遊びをしたりと、6 年間を通しての外国語学習に力を入れている。

訪問当日は、まず校長先生から学校説明を受け、学校の概要に始まり、目指す学校像である「教師も生徒も生き生きと輝く学校」についての考え、ユニバーサルデザインの授業、特別支援教室、ICT 環境の整備、教員の働き方改革、小中学校の連携体制、など実に様々な取組について説明いただいた。続いて、体育館で全校生徒による歓迎集会が行われた。歓迎集会では、生徒が「ナマステ（こんにちは）」とヒンディー語で挨拶をしてインド教職員を歓迎すると、ステージ上で代表生徒による迫力あるソーラン節が披露され、インド教職員に生徒一人一人からうちわがプレゼントされるなど、とても暖かい歓迎を受けた。インド教職員も一人一人自己紹介をし、インドの出身地について全校生徒に説明をして交流をした。

その後の授業見学では、国語・算数・体育・特別支援教室をじっくり時間をかけて見学し、学習指導案を見ながらどのような指導が行われているかを学んだ。特に特別支援教室の授業見学では、どのような目的に沿って各活動が行われているのかを学ぶ貴重な機会となった。給食の時間にはインドの先生方が生徒に手を引かれて各学級に行き、生徒と一緒に食事をする機会があり、生徒との直の交流に目を輝かせる光景が見られ、インド教職員にとって忘れられない思い出となった。

生徒からうちわのプレゼントを受取る

国語の授業を見学

インドの民族衣装を校長先生にプレゼント

Q&A より（抜粋）

Q：教師は特別支援教育の資格をみんな持っているのか？

A： 本校の特別支援教室では教師は週に 1 回の研修を受けており、特別支援教育の資格がなくても教えている。

Q：習熟度別クラスはどのように分けているのか、保護者から意見やクレームは出ないのか？

A： ①より自主的に学習をする生徒、②一定の理解度に到達している生徒、③理解に時間がかかる生徒、というように分けている。分け方は、プレテストを実施し、生徒自身がクラスを選び、親にも相談した上でクラス分けを行っており、クレームにはつながらない。

Q：ICT ツールをどのように活用しているか？

A： 英語の授業では英語動画を使って英語の歌やダンスをしている。音楽の授業では先生がピアノを弾く動画を流し、理解の早い子は動画を見ながら自分で弾き、サポートが必要な生徒のところには先生が回るなどのように使っている。また、ICT からは少し離れるが、プログラミング学習では「ビスケット」という教材を使っている。ユニバーサルデザインの指導方法を取り入れ、発達段階別にユニバーサルな視点を取り入れて教育していくということを行っている。

Q：授業に瞑想を取り入れているか？

A： 瞑想は行わないが、リラックスタイムは都度取るようにしている。

Q： インドでは女子の就学率が課題となっているが、日本では女子だけの教育施設や女子に対してインセンティブを与えるような制度はあるか？

A： 女子高は私立ではあるが、女子にインセンティブを与えるという意味での特別措置は日本ではない。

10 月 17 日（木）府中市立府中第三中学校（東京都）

訪問スケジュール

時間	内容
13:45-14:15	挨拶、学校概要説明
14:45-15:15	生徒総会の参観
15:20-16:20	生徒会役員との懇談会
16:30-17:20	部活動見学
17:20-17:40	質疑応答

生徒会役員との懇談会

施設の特色、特記事項

同校は 1960 年に創立された公立の中学校で、特別支援教室拠点校であり、平成 31 年度東京都コーディネーショントレーニング地域拠点校でもある。校訓は「自他の敬愛」で、人権を尊重する態度を育成すると共に心と体の健康づくりを推進して、社会の変化に主体的に対応し、自主性と創造性、更に公共の精神に富んだ忍耐強い生徒を育成することを教育目標としている。

訪問当日は、まず校長先生が英語で学校説明をしてくださり、続いて生徒総会を見学した。生徒総会を見学したインド教職員からは、生徒総会の雰囲気がとても静かで生徒が規律正しく動いており、日本の生徒の自律性に大変驚いたといった声が聞かれた。その後の生徒会役員との懇談会では、まず生徒会役員から生徒会について英語で説明があり、続いて、聞いてみたい事を対談式で聞く時間があった。部活動見学では、様々な部活動のほか、コーディネーショントレーニングも見学し、インド教職員も生徒達に交じって体を動かした。校内を見学中は生徒達が積極的に挨拶をしてくれ、インド教職員も大変嬉しそうな様子であった。訪問の最後に校長先生からご挨拶があり、ご自身も海外研修の経験がある事について触れられ、インドの先生方にとっても今回の経験が大きな財産になることを願っており、その役に少しでも立てたのであれば嬉しいというメッセージをいただいた。

吹奏楽部の練習を見学

コーディネーショントレーニングに参加

インドの民族衣装を校長先生にプレゼント

Q&A より（抜粋）

【インド教職員→生徒への質問】
Q：学校生活で一番楽しいことは？
A：友達と話したり部活をすること。

Q：部活動にはどんな効果がある？
A： 準備や片付けを習慣づけ、上下関係・助け合うこと・臨機応変に行動することなどを学べる。また、クラスではあまり話すことができない友人ともゆっくり話せる。

【生徒→インド教職員への質問】
Q：インドの生徒の一日の大まかなスケジュールは？
A： ホームルーム、お祈り、先生の話、朝礼、１～４時間目の授業、昼食、５～７時間目の授業、休憩、ホームルーム。お祈りは一日のスタートのためとても大切なものであり、体づくりとしてのヨガも行っている。

Q：インドにはどんな校則があるか？
A： 制服の着用、時間を守る、人にやさしくする、規律を守るなど。生徒会や先生の指導のもと、クラスの監視機能が働いている。

【インド教職員から学校への質問】
Q：部活動の数と関わる教員の数について知りたい。
A： 16 の部活動があり、先生は全員いずれかの部活動の顧問になっている。

Q：部活はどのように選ぶのか、途中で変えることはできるか？
A： 入学当初に自分で選ぶが、進級の際に選択し直すこともある。年度途中での変更もありうるが、何でも OK にしているわけではなく、意思確認を経てから変更をする。

【学校からインド教職員の質問】
Q：この学校でどんなところに関心を持ったか？
A： 統率がとれているところ、生徒が規律を守っているところ、この学校への帰属感が生徒を幸せな気持ちにしていて学校にいることを不満に思っている子がいないと思うところなど。

Q：インドでは土日に授業はあるか？
A： ある。インドでは多様な背景を持った子ども達を教える必要があり、女子に特化した教育や貧しい子供への教育などにも対応する必要がある。

10 月 18 日（金）文化・教育施設訪問（東京都）

土器や銅鐸など重要文化財の品々を見学

東京国立博物館前にて集合写真

浅草寺を参拝

訪問団は、午前に ACCU で行われた訪問団員によるミーティングで一週間のプログラムを振り返り、翌日の報告会での発表の準備を行った。そして午後は、文化・教育施設訪問として、東京国立博物館・浅草寺・お台場を訪問した。

まず、一行は上野に到着すると、東京国立博物館の本館にてボランティアガイドの方々のガイドのもと、縄文時代から江戸時代までの各時代の重要な文化財を見て回った。その後、考古展示室を見学し、石器時代から近代までの日本の歴史をたどり、縄文時代の土偶・弥生時代の銅鐸・古墳時代の埴輪などを見て回り、日本文化を総合的に学んだ。

博物館の見学後は浅草へ向かい、日本の宗教としての仏教とお寺についての説明をガイドさんから受け、先日訪問した神社とはまた異なるお寺の参拝方法についても学んだ。訪問団にはヒンドゥー教徒・シーク教徒・キリスト教徒がおり、信仰している宗教は様々だったが、インドは多様性に富んだ国であるため、それぞれの宗教を尊重しているとのことで、日本の神社やお寺でも熱心に参拝していた。また、インド教職員は神仏に対する関心が非常に高く、神社やお寺ではお守りやお札などをこぞって買い求める姿が見られた。訪問当日、浅草寺ではちょうど縁日が催されており、江戸時代の着物姿をした人々が奏でるお囃子の中、「金龍の舞」という獅子舞に似た舞を見ることができ、訪問団は大いに喜んだ。

浅草寺参拝の後は、歩いて隅田川沿いに出て、東京スカイツリーを川沿いから見学した後、浅草からお台場まで走る船に乗り、江戸時代の水上網の説明等を受けながらお台場に向かい、夕食を取ってこの日のプログラムを終えた。

10 月 19 日（土）日印教員交流会

最終日の 10 月 19 日は、プログラム最後の活動として JICA 地球ひろばにて日印教員交流会が開催された。交流会にはインド教職員 12 名と、公募によって日本全国から集まった 12 名の日本の先生方が参加し、一日を通して下記のようなプログラムで交流が行われた。

【午前の部】
・イントロダクション
・自己紹介
・グループディスカッション＆共有①

【午後の部】
・グループディスカッション＆共有②
・国際交流の事例紹介
（1）日本側：東京都立王子特別支援学校 町田直美先生
（2）インド側：Bal Bharati Public School ソニア・チャップラ先生
・グループディスカッション＆共有③

この交流会は、招へいプログラムの目的である「インドと日本の相互理解と友好の促進、および平和で持続可能な世界の実現」に向けて、教職員同士の更なる学び合いや交流の場を提供するために行われた。当日の流れとしては、国際交流の実体験をし、それを通して「国際交流」と「平和で持続可能な世界」の関係性や国際交流の意義について共に考え、最後には国際理解教育・ESD・GCED などの平和で持続可能な社会に向けた教育活動についてインドと日本の教職員が共に考えるという流れであった。当日の詳細は次のとおりである。

午前の部は、まずグループで自己紹介をし、お互いに聞いてみたいことについて 1 時間ほど自由にグループディスカッションを行った。グループディスカッションでは、インドや日本の教育現場の現状や問題点、インド・日本の文化など、各自関心のあるトピックについて熱心に情報交換を行った。

その後、その国際交流の実体験を通して、「私たちは異文化に触れるとどう感じるか？何が起きたか？」というテーマについて話し合った。異文化に触れることで、さらに興味を持った、違いだけでなく共通点を見つけた、親近感が湧いた、互いを尊重するようになった、愛と友情が芽生えた、見方が変わった、視野が広がった、などの意見などが出た。

グループディスカッションの様子

午後の部の冒頭では、午前に行った国際交流の実体験とそれによって起こった変化に関するディスカッションを経て、「国際交流の経験から生徒に何を伝えたい？なぜ？」というテーマでディスカッションを行った。ディスカッションでは、結局どの国の子供も同じであり我々は皆同じ人間であり地球市民であることを感じたということを生徒に伝えたいという意見や、心を開き海外に目を向けて色々なことにチャレンジすることを伝えて生徒の世界観を広げたいといった意見等が出た。

続いて、平和で持続可能な社会に向けた教育活動の事例紹介として、日本とインドそれぞれの代表から教育現場での国際交流活動に関するプレゼンテーションが行われた。日本側は、東京都立王子特別支援学校の町田直美氏が日韓交流について発表し、ACCU の韓国派遣プログラムに参加したことをきっかけに始めた韓国との様々な交流の紹介と、交流によってもたらされた韓国の子供の対日感情の変化について語られた。続いてインド側からは、Bal Bharati Public School のソニア・チャップラ氏がインドと日本を含む様々な国との生徒同士の国際交流について紹介し、平和構築や地球規模課題の解決における国際交流・国際理解教育の役割や意義について語った。

事例紹介の後は、これまでの議論を踏まえ、「国際交流は世界平和に貢献するか？なぜ？」というテーマについてグループディスカッションを行った。国際交流によってお互いの考えを理解することが重要であり、それにより絆が深まるので平和に貢献するという意見や、あるインド教職員はインドと隣国との紛争について触れ、政府間の関係に問題があっても、国民同問同士が交流することで、小さな動きが大きな動きになり、ひいては紛争解決に繋がるという意見を述べた。

グループで話したことを全体で共有

韓国派遣に参加した教職員の発表

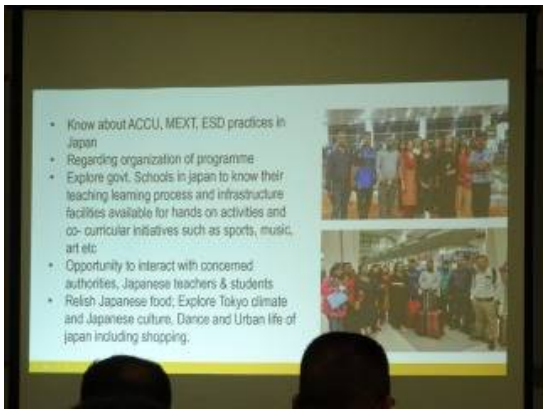
最後に一日の締めくくりとして、「平和で持続可能な世界の実現のために教師として何ができるか？」というテーマについてグループディスカッションを行った。ディスカッションでは、様々な地球規模課題について現状を自覚して生徒に地球市民性を身に付けさせるという意見や、認め合うことや繋がり合うことの大切さを子供たちに伝える、国際交流を通してお互いを尊重することや共同体意識を持つことを教える等の意見が出た。交流会を終えたあるインド教職員からは、「以前は国際交流が世界平和に対してできることは限定的だと考えていたが、今では国際交流は世界平和を実現するためのベストな方法だと考えるようになった」といった声も聞かれた。

10 月 19 日（土）報告会・閉会式

日印教員交流会の終了後は、報告会・閉会式が同じく JICA 地球ひろばにて行われた。まず、実施機関である文部科学省大臣官房国際課海外協力官の荒井忠行氏と、協力機関である在日インド大使館二等書記官のカラン・ヤダフ氏から開会挨拶があった。

その後、訪問団代表によるプログラムの報告が行われ、各日程で経験したことについての感想のほか、日本の教育制度からどんなことを学び、一方でインドからはどのような点を日本の教育の参考できると思ったか、といったことが発表された。訪問団の報告が終わると、今回の訪問受入れ校である千葉県立松戸国際高等学校校長・加茂進氏と、府中市立府中第三小学校教諭・吹越菜央氏から、報告を聞いた感想やコメントが訪問団に対して送られた。

続いて、ACCU 理事・三木繁光氏から訪問団との間で記念品の交換が行われ、その後、訪問団一人一人に参加証明書の授与が行われた。最後に、ACCU 理事・杉江和男氏、そして訪問団長のアニル・ゲローラ氏の閉会挨拶により報告会は閉会し、全てのプログラムが終了した。



訪問団によるプログラムの報告

参加証明書を一人一人受け取る様子

記念品交換をする ACCU と訪問団

閉会挨拶をするアニル・ゲローラ団長

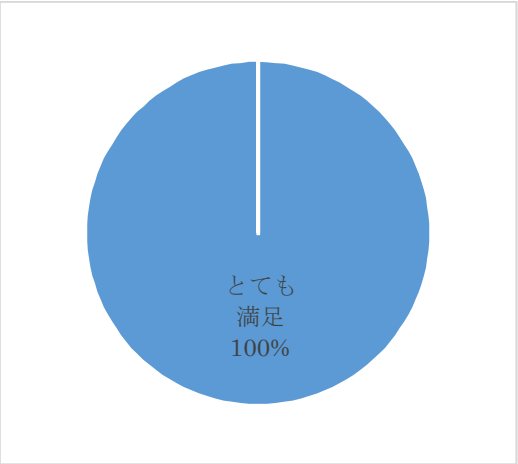
３．コメントと提案

1. インド教職員
2. 受入機関
3. 事業担当者

1. インド教職員

（※有効回答数 12、　記述部分（原文は英語）はランダムに抽出）

◆質問 1. プログラム全体の満足度



A-02 Anil Gairola（非常に満足）
綿密に計画され、実行されていた。

A-06 Santosh Kumar Chaurasia
（非常に満足）
このプログラムは日本の文化、価値、教育制度について知る素晴らしいきっかけとなった。大変楽しんだし、予想以上に学びがあった。

A-07 Anita Kanwar（非常に満足）
日本についての理解を深め、お互いについて学ぶいい機会だった。

A-9 Manish Kumar Pandey（非常に満足）
インドと日本の良い関係を築ける素晴らしいプログラムだった。

A-11 Sonia Chhabra（非常に満足）
このプログラムの目的は、教育を通した国を超えた相互文化理解であり、我々は教師として人に会い、学校を訪問し、日本の教育だけでなく文化や伝統に対しても視野を広げることができた。

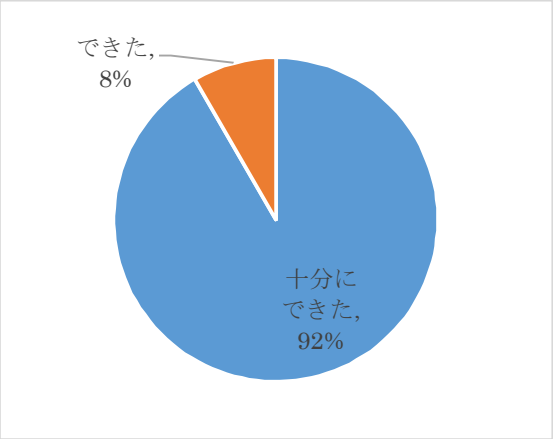
◆質問 2. 参加目的

A-03 Rongneisong Risoreng Koiren
日本の教育制度、ESD の実践、カリキュラム実行について理解するため。

A-06 Santosh Kumar Chaurasia
日本の価値観、文化、伝統的食事、カリキュラム、教育課程で使われる ICT について視察するため。

A-07 Anita Kanwar
日本人、または教師や児童・生徒との相互理解を促進するため。

◆質問 3. 参加目的は達成できたか



A-01 Santosh R Sutar
日本の学校や教師と非常に良い関係を築くことができた。

A-04 Chandana Bania
松戸高校と府中第三小中学校にて革新的な教授法を見ることができた。

A-05 Manjeet Singh
地元の学校を訪れ、教師と交流する機会があった。

A-07 Santosh Kumar Chaurasia
日本の教育制度、文化、宗教等について学ぶことができた。

A-11 Sonia Chhabra
複数の学校で時間を過ごす機会が与えられたことによって、教育制度を間近で観察し、彼らのありのままを理解することができ、自分の学校に適用したり、他の人に共有したいグッドプラクティスを得ることができた。

◆質問 4. 当初の目的以外で、このプログラムから得られたものはあるか

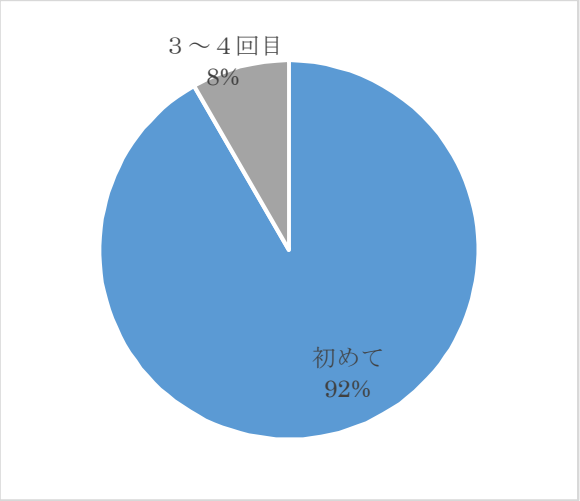
A-01 Santosh R Sutar
ネットワークと親切心が日本人にはあり、日本はアットホームだということがわかった。

A-04 Chandana Bania
日本人的な価値観や伝統、時間を守ること、清潔さ等について学んだ。

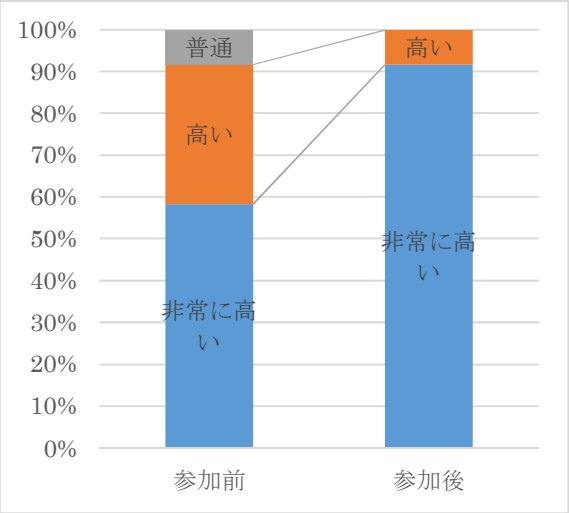
A-05 Manjeet Singh
日本人の食生活やコミュニティへの貢献について学んだ。

A-10 Marry Sorna Rani
日本の子どもたちから「我々は違う国に住んでいても 1 つの世界に住んでいる」ということを学んだ。

◆質問 5. 日本に来日するのは何回目か



◆質問 6. プログラム参加前後での日本の教育全般への関心の変化



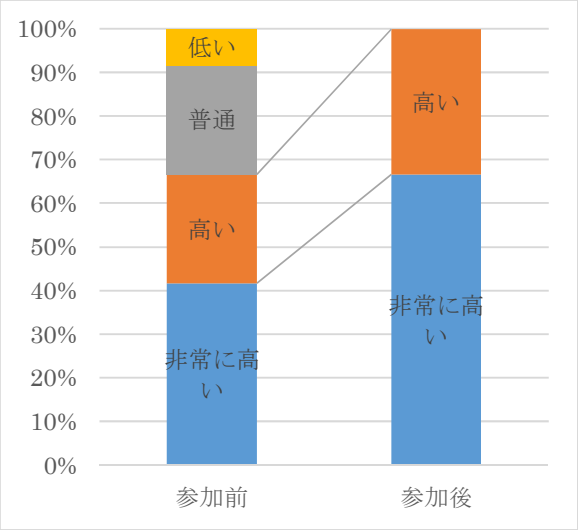
A-03 Rongneisong Risoreng Koiren
（高い→非常に高い）
日本は技術的に最も発展した国であり、我々はこれに貢献している基礎教育がどのように関係しているか知りたかった。

A-05 Manjeet Singh
（非常に高い→非常に高い）
このプログラムに参加する前は日本の学校教育制度について詳しいことは知らなかったが、参加後は大分詳しくなった。

A-09 Manish Kumar Pandey（非常に高い→非常に高い）
来日前は日本の教育制度についてよく知らなかったが、プログラム参加後、特に文科省での講義を受けた後は教育制度への理解が深まった。

A-11 Sonia Chhabra（高い→非常に高い）
日本にはインドで我々が行っていることや制度と似たものがあるが、統率・オーナーシップ・職業教育等については賞賛に値する。今はなんとなく知っただけだが、より深く理解したいと思った。

◆質問 7. プログラム参加前後での日本の教育全般への理解度の変化



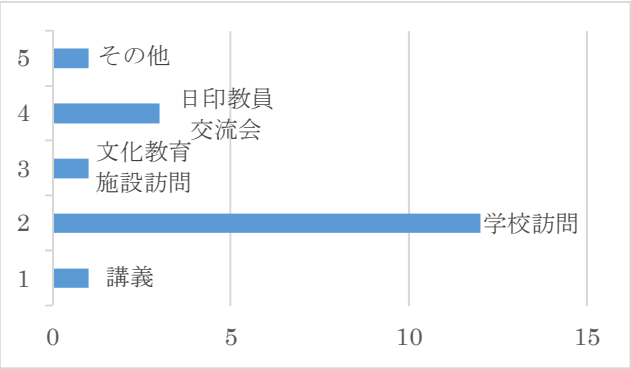
A-05 Manjeet Singh
（普通→非常に高い）
以前は日本の教育について少ししか知らなかったが、参加後は深く明確に理解できるようになった。

A-06 Santosh Kumar Chaurasia
(普通→高い)
このプログラムによって、カリキュラム、価値教育、技術、部活動等について知ることができるようになった。

A-11 Sonia Chhabra（普通→高い）
このプログラムによって現行のカリキュラムの決定と構成について理解できた。

A-12 Poonam Dua（高い→非常に高い）
プログラム参加後は日本の教育における価値体系について理解するようになった。

◆質問 8. 日本の教育の理解に役立った項目を一つ選んでください



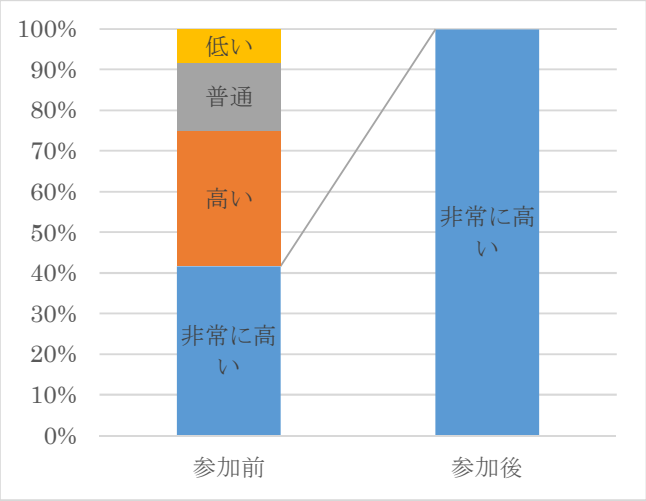
A-02 Anil Gairola（学校訪問）
実際に足を運ぶことが講義や会議よりもためになった。

A-05 Manjeet Singh（学校訪問）
直接教師や校長とふれあうことで日本での教育について知ることができた。

A-07 Anita Kanwar（学校訪問）
授業見学や教師・生徒と話すことで、平和で持続可能な社会に気づくための良い慣行を学んだ。

A-10 Marry Sorna Rani（講義/学校訪問/文化教育施設訪問/日印交流会/その他学校訪問）
すべての活動が日本の教育を理解するのに役立った。

◆質問 9. 国際理解教育への関心の変化



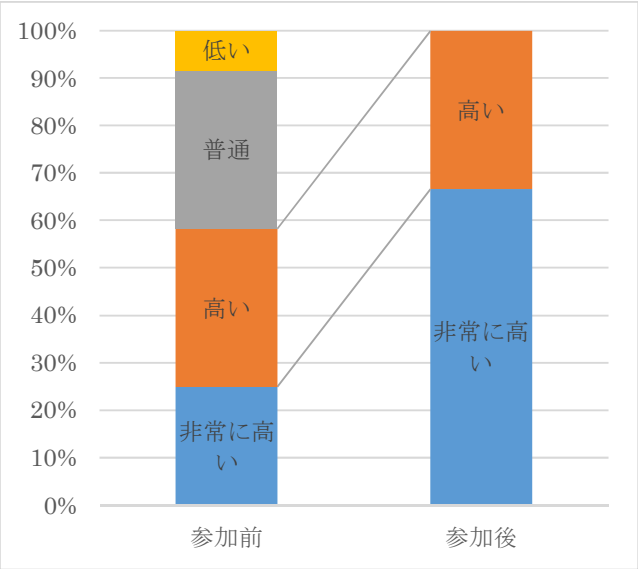
A-04 Chandana Bania
（非常に高い→非常に高い）
国を超えて平和を促進するための教育だということがわかった。

A-05 Manjeet Singh（非常に高い→非常に高い）
参加前は国際交流プログラムはある程度しか国際理解には役立たないだろうと考えていたが、参加後は国際交流こそが国際理解の最善策だと思った。

A-08 Preeti Shrivastava（高い→非常に高い）
自己啓発をして知識を豊かにする経験をし、多くのものを得た。児童・生徒と教師と楽しく交流した。

A-12 Poonam Dua（高い→非常に高い）
国際理解教育について自分の学校の教師や児童・生徒に共有することができるほど学んだ。

◆質問 10. 日本への理解度の変化



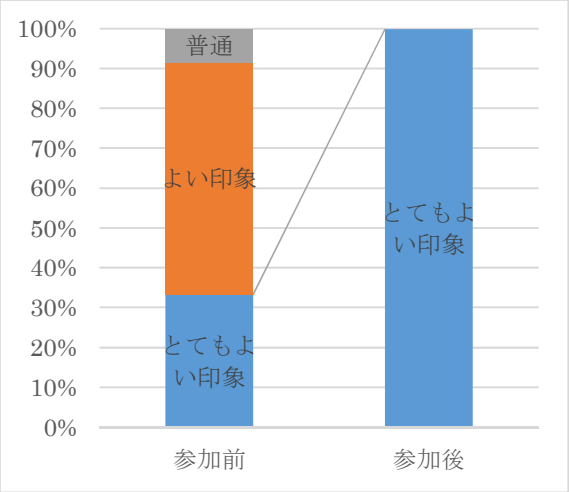
A-01 Santosh R Sutar
（高い→非常に高い）
実際に訪れて日本人とふれあうことで理解度が変わった。

A-05 Manjeet Singh
（高い→非常に高い）
友人の話や本で見知ったことは生きた情報ではなく、実際の訪問によって日本を実体験したことで日本を理解した。

A-06 Santosh Kumar Chaurasia
（低い→高い）
日本人や教師と関わることで日本をより良く理解することができた。

A-12 Poonam Dua（普通→非常に高い）
滞在中に日本人と関わることで日本を理解することができた。

◆質問 11. 日本及び日本人の全体的な印象の変化



A-01 Santosh R Sutar（良い→非常に良い）
ひとえに日本人は最高で、奥ゆかしく礼儀正しいと思うようになった。

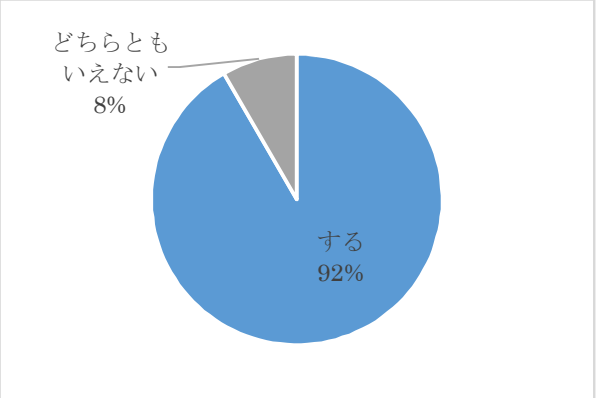
A-02 Anil Gairola（普通→非常に良い）
あまり興味がなく関わりもなかったが、人との関わりで感銘を受けた。

A-03 Rongneisong Risoreng Koiren
（良い→非常に良い）
日本人は時間を厳守し、時間を大切にし、他人への敬意をとても良く表すと思った。

A-10 Mary Sorna Rani Daniel（非常に良い→非常に良い）
いつもにこやかで良い人々だった。

A-12 Poonam Dua（良い→非常に良い）
日本は非常に発展し教育の進んだ国で有あり、それでいて謙虚で友好的な日本の人々に出会う機会を私は得た。

◆質問 12. このプログラムの経験を共有するか。

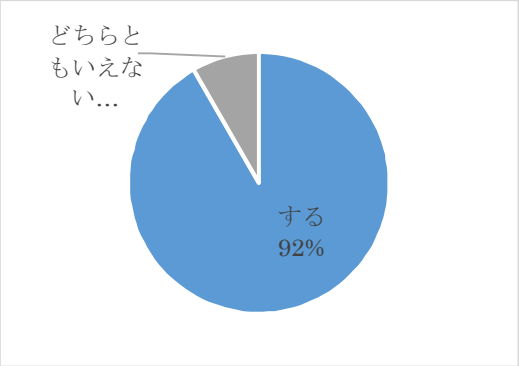


A-02 Rongneisong Risoreng Koiren
（する）
人々が歓迎してくれたことや、学校訪問、児童・生徒が私達と触れ合って嬉しそうだったことを報告する。

A-9 Manish Kumar Pandey（する）
ここで学んだことは全て共有する。私の経験から皆も学ぶだろう。

A-11 Sonia Chhabra（する）
日本に対する愛と尊敬を皆が持つように、生徒総会で生徒・職員に日々の出来事を話し、レポートにもまとめて共有する。

◆質問 13．今回の体験を自身の教育活動に活用するか



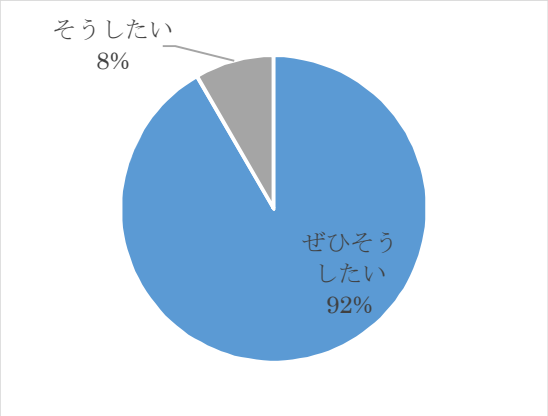
A-03 Rongneisong Risoreng Koireng(する)
インドの新しいカリキュラム策定やクラス運営において活用する。

A-06 Santosh Kumar Chaurasia(する)
自分の教育指導にこの経験を活かし、実験的かつＩＣＴに基づいた授業運営をする。

A-09 Manish Kumar Pandey (する)
お互いを思いやることと、交流して理解し合うことを取り入れる。

A-11 Sonia Chhabra (する)
実施されていたことは全て私の学校で試されるべき手段であり同僚にも共有する。

◆質問 14．プログラムで知り合った日本の教職員との交流を継続したいと思うか



A-03 Rongneisong Risoreng Koireng
(非常にそう思う)
ESD 活動・プロジェクトの実施や職業訓練でコラボしたい。

A-04 Chandana Bania
（非常にそう思う）
教育方法などの情報交換をメールや Facebook で行いたい。

A-05 Manjeet Singh (非常にそう思う)
文化・技術的交流を日本の学校と行いたい。

A-07 Anita Kanwar (非常にそう思う)
文化交流のために日本人教師をインドに招待したい。

A-09 Manish Kumar Pandey (非常にそう思う)
環境と気候に関係するプロジェクトを日本の学校と協働で行いたい。

◆質問 15．プログラムを通して自分自身にどのような変化が生じたか。

A-03 Rongneisong Risoreng Koireng

自分自身が本当に変わった。日本人の規律正しさや価値体系を自分の目で初めて見て、とても影響を受けた。この事を学びとして持ち帰りたい。

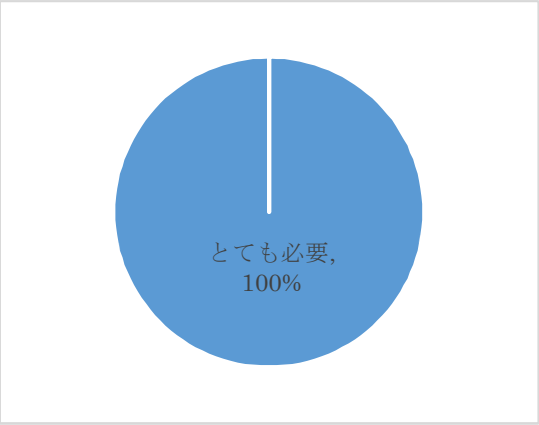
A-9 Manish Kumar Pandey

国際社会構築のためには生徒たちを変えることが必要だと思うようになった。

A-11 Sonia Chhabra

単に日本への尊敬の気持ちが生まれただけでなく、日本人から様々な価値観を学んだ。

◆質問 16．インド教職員招へいプログラムの継続は必要だと思うか。なぜか。



A-01 Santosh R Sutar

両国のより良い関係と互いへの尊重のために継続するべきだと思う。

A-06 Santosh Kumar Chaurasia

インドと日本の関係を確固たるものし、教育の最善策を実現するため継続するべきだ。

A-07 Anita Kanwar

必要だと思う。このプログラムによって相互理解と両国の友好関係が続くだろう。

A-08 Preeti Shrivastava

このようなプログラムが国際平和・人道的な相互理解を促進する。

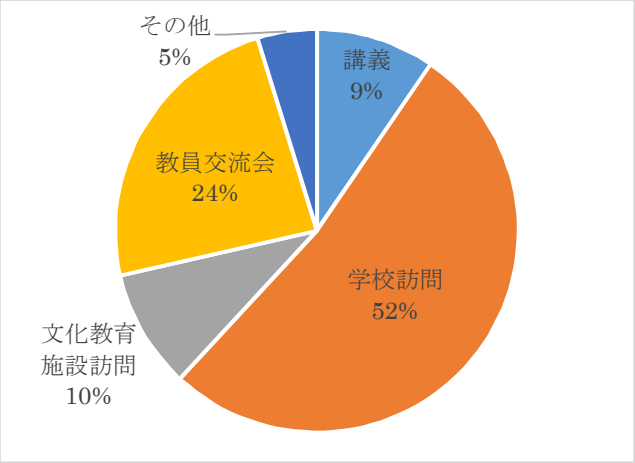
A-09 Manish Kumar Pandey

このような機会がグローバルな社会や平和に繋がるので現代の世界に必要である。

A-11 Sonia Chhabra

このようなプログラムは壁を壊し、インドと日本の平和に向けた共同作業の助けとなるだろう。

◆質問 17．プログラム中で最も有意義だと感じた活動

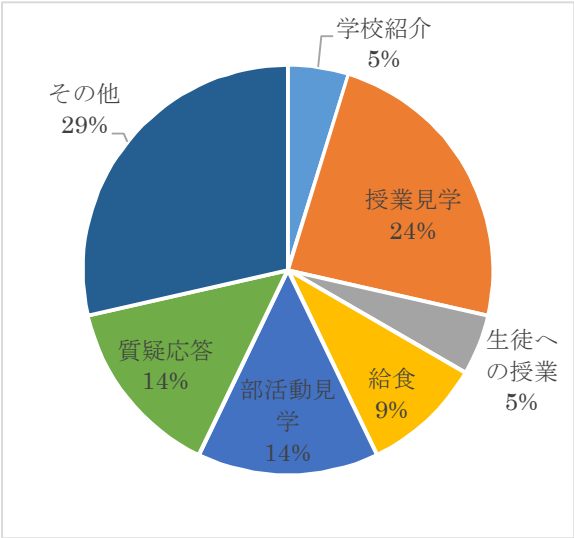


A-05 Manjeet Singh（学校訪問）
全てのアクティビティが生涯大事にしたいものとなったが、特に学校訪問と教師と児童・生徒との交流はもっとも素晴らしいものとなった。

A-06 Santosh Kumar Chaurasia
（学校訪問&教員交流会）
学校訪問と教員交流会は最も重要で、教育制度に関する高いレベルの情報が得られた。

A-11 Sonia Chhabra（学校訪問&教員交流会）
学校訪問と教員交流会は直接的なかかわりを持てた点で一番有意義で、授業見学は非常に印象的だった。

◆質問 18．学校訪問に関して最も有意義と感じた活動



A-03 Rongneisong Risoren Koiren
（授業見学）
授業見学では教師がどのように授業を行い、生徒に機会を与えているか見ることができた。

A-05 Manjeet Singh（給食）
生徒と交流することができ、児童・生徒も我々と交流して多くの質問ができ、児童・生徒も我々に多くの質問ができた。

A-07 Anita Kanwar（部活動見学）
取り組みの一つ一つが非常に意味があり、生徒は特に部活動に一生懸命取り組んでいた。部活動は社会マナーと才能を育てると思う。

A-11 Sonia Chhabra（質疑応答）
教師との質疑応答は最も意味のあるもので、日本の学校カリキュラム、教授法、情報源、困難などについて知ることができた。

◆質問 19. 他にどのような活動がプログラムにあったらよいと思うか

A-01 Santosh R Sutar

職業訓練学校の訪問。

A-02 Anil Gairola

日本の主要な教育関係者との交流。

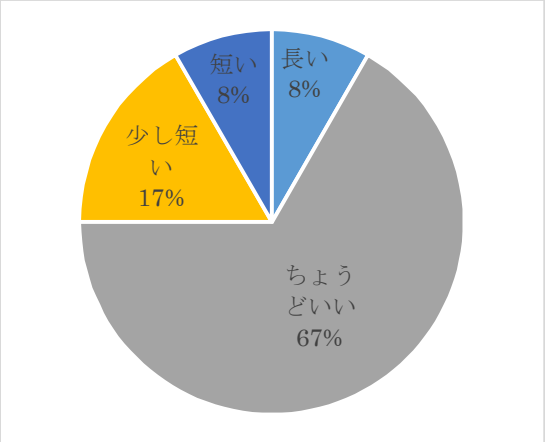
A-07 Anita Kanwar

地元の人と触れ合い、生活や文化を知れるような活動。

A-11 Sonia Chhabra

日本とインドの生徒が授業で手紙を交換したりビデオ電話で交流できるような機会。

◆質問 20. 全体の日程の長さについて



A-02 Anil Gairola（ちょうど良い）

バランスが良かった。

A-05 Manjeet Singh（少し短い）

8 日は東京を回るには短い。

A-11 Sonia Chhabra（ちょうど良い）

お互いを知り、文化を感じるためには最低でも 1 週間は必要。

◆質問 21. プログラムの改善点について。

A-02 Anil Gairola

インドへ日本人教職員を招へいする交流事業があるとよい。

A-10 Marry Sorna Rani

教師ともっと長い時間交流をしたい。

A-12 Poonam Dua

教師ともっと時間を過ごせれば深い理解が得られ未来に役立つため、教師と交流する機会をより増やして欲しい。

２．受入校コメント

千葉県立松戸国際高等学校　教諭　中原章子氏

① プログラムの全体的な感想・印象

今回のインドの先生方の受け入れは、本校生徒・職員にとって、インド（南アジア）に目を向ける新たな国際理解・交流の機会となり、大いに有意義なものであったと思います。

② 子どもたちが得たもの

今回、インドの先生方からも授業を受けることができ、これらにより、インドをいう国を身近に感じることができたと思います。また、授業ではインド数学の奥深さや現代のインド事情について講義をいただき、インドに関する認識を一新することができました。あとで多くの生徒から、自分たちのクラスにも来てほしかったと言う声があり、生徒の関心の高さがうかがわれました。

③ 教員・学校が得たもの

国際理解や交流というと、どうしても欧米や中国等東アジアに目がいきがちでしたが、インドという南アジアの中心の国から先生方をお迎えすることができ、交流の可能性を広げることができました。

④ 苦労した点

インドの先生に授業をしていただきましたが、どのような授業がよいのか設定が難しかったです。また、通常の授業日が来校日であったため、ホームルーム単位で迎えて交流するなどの設定が難しかったです。

⑤ 加えるとよいと思われる活動

ホームルーム単位で先生方と生徒との交流ができると、生徒にとっての国際理解が深まると思います。また、実際の交流の前に、インドに関する基礎知識を得たり、雰囲気づくりのために資料やポスターなどをいただけると助かります。

⑥ プログラムの改善に向けた助言

教員同士の交流は、国際理解教育にとって一番効果のあることと思います。たとえ国や民族が違っても、同じ教員同士、共通する課題があり理解しあえますし、また国が違うと違う課題もあることを知ることが教員としての視野を広げ、意義のあることと思います。交流を有意義なものにするために、事前の情報交換の機会をもっと充実させられると良いと思いました。

府中市立府中第三小学校　主任教諭　吹越菜央氏

①　プログラムの全体的な感想・印象

全体を通して、訪問を受け入れることができてよかったと思っています。日常の中ではなかなか出会うことのないインドの方とお話しできたことは、子供達はもちろん、教職員にとっても良い機会となりました。

②　子どもたちが得たもの

訪問日までに事前授業としてインドに関するクイズを行ったり、写真を見せたりしてインドを身近に感じられるよう工夫しました。そして実際にお会いして話ができたことで更にインドへの興味を高め、「将来行ってみたい」と考える児童が多くいました。また、普段の生活では学んだ英語を実際に使う機会に恵まれないため、今回のインドの方々との交流によって、英語を使い、「学んだ英語が通じた」という体験ができ、自分の英語に自信がもてたと感想を書いた児童が多数いました。

③　教員・学校が得たもの

なかなか知ることのできないインドの教育について知ることができました。

④　苦労した点

通常の授業や公務に加えての準備は正直大変でした。また、学校全体を巻き込んで行うことに多少の困難を感じました。

⑤　加えるとよいと思われる活動

数時間の訪問や交流だけでなく、２日間など期間を伸ばすことで更に児童との関わりが増え、交流した実感がわくと思います。また、継続的な交流ができるようにしていただけたら嬉しいです。

⑥　プログラムの改善に向けた助言

貴重な時間をありがとうございました。

府中市立府中第三中学校　校長　高岡麻美氏

①　プログラムの全体的な感想・印象

・近隣小学校の訪問の後、本校にお見えになり、小学校と中学校との違いがわかって良かったのではないかと思う。

・生徒総会を見ていただいたが、中学生らしい生徒の自治活動の一端を見ていただけて良かったと思う。整列の状況を見て、驚かれていたのは、規律を大切にする生活指導と理解していただいた。

・東京都コーディネーショントレーニング推進校として、部活動の生徒に外部講師が指導してくださっている場面も見ていただけて良かった。都の担当指導主事も来校中で、直接インドの先生方に東京都の生徒の体力の状況やコーディネーショントレーニングのことを説明できて良かったと言っていた。

・授業を見ていただくことはできなかったが、多様な視点から日本の教育活動を紹介できて良かったと感じている。生徒との直接交流は生徒会役員や部活動生徒の一部に限られたが、積極的にかかわっていただき感謝している。

②　子どもたちが得たもの

生徒会役員との懇談会を設けていただき、とても良かった。日ごろ外国人と直接接する機会は ALT の先生以外にほとんどなく、生徒自身が準備してきた英語の原稿を読み、学校のことを紹介することができたのはとても良い経験になったと思う。インドの先生方から質問されたことを自分の言葉で答えたり、また自分たちから質問したりしたことは、新生徒会役員にとって大きな自信につながったと感じている。

③　教員・学校が得たもの

本校教員との直接交流はほとんどなかったが、かかわった教員にとっては広く視野を持つ機会となったと感じる。生徒総会やコーディネーショントレーニングの様子を見ていただくことで、学校のやっていることが国際的にも評価されていると感じたのではないかと思う。

④　苦労した点

特別時程をとることなく、平常の教育課程の中で進め、無理なくできたと思う。

⑤　プログラムの改善に向けた助言

特になし。

３．事業担当者コメント

ACCUは「心の中に平和の砦を」というユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するための様々な活動を実施しており、その活動の一つとして教職員の国際交流事業を20年にわたり行ってきました。未来を担う子供達に大きな影響力を持つ教職員の方々が国際交流を通して相互理解を深め、お互いから学び合い、さらにその学びを子供達に還元し、学校レベルでの国際交流を育むことで、ひいては国レベルでの相互理解と友好が促進され、平和で持続可能性な世界の実現に繋がるという考えが事業実施の背景にあります。

今年のインド教職員招へいプログラムでも、訪問団は各訪問先で心のこもった大変暖かな歓迎を受けました。学校訪問ではインドの先生方が教育活動を見学するだけでなく、日本の児童・生徒にインドについて紹介する授業を行ったり、児童・生徒と給食を食べながら自由な会話をするなど、心が通じる直の交流ができ、日本とインドの相互理解と友好の促進に繋がったと考えております。また、一日をかけて実施した日印教員交流会には日本全国から日本の先生方にお集まりいただき、平和構築における国際交流の意義についてインドの先生方と議論を交わし、平和で持続可能な世界の実現に向けた教育活動を共に考えるという機会がありました。交流会では、出会ったインドと日本の先生方が学校間交流に向けて早速動き出している様子も見られ、平和で持続可能な世界の実現に向けて日印の連携が始まる気配が感じられました。

最後になりましたが、同プログラム実施にあたりましては、実に多くの皆様の御支援と御協力を頂きました。訪問受入校の皆様、在日インド大使館、日印教員交流会にご参加頂いた日本の先生方、そしてその他の教育機関の方々には、大変暖かくインドの先生方をお迎え頂きましたことに、ここに改めて厚く御礼申し上げます。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
国際教育交流部　藤澤弥生

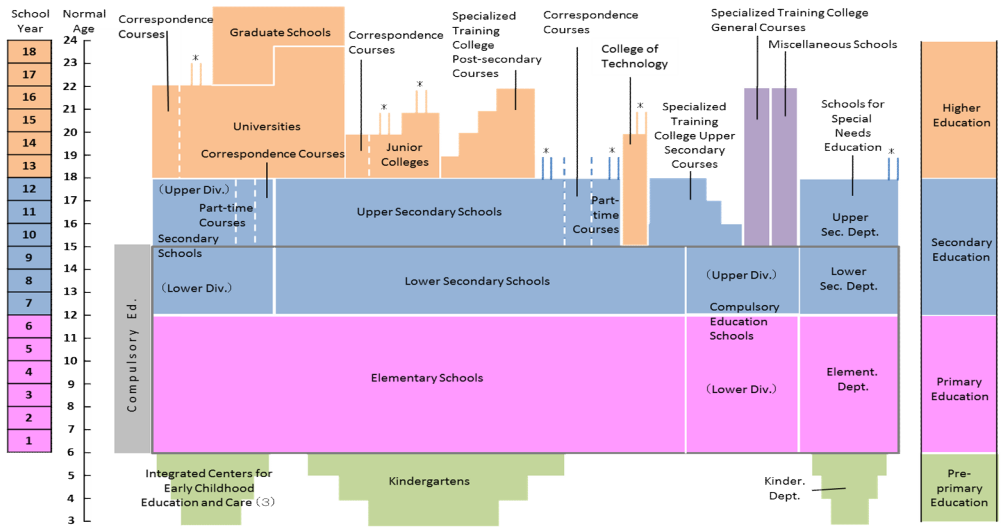
付録

Overview of Japan's Elementary and Secondary Education

Office for International Planning and Coordination
Elementary and Secondary Education Bureau
Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology
15th October, 2019

文部科学省

Japanese School System



(Notes) (1) ＊ indicates specialized courses
(2) Higher education schools, secondary education school/latter period courses, universities, junior colleges, and special needs schools can have separate courses with course terms of 1 year or more.
(3) A child aged from 0 to 2 years old can attend the center because it functions as school and child welfare.
(4) Age and admission requirements for Specialized Training College General Courses and Miscellaneous Schools are not defined uniformly.

Number of schools, students and teachers

Kindergarten
Age*:3-5 years old
No. of kindergartens: 10,069
(National/public 3,531 Private 6,538)
No. of children: 114.6K
(National/public 17.3K Private 97.2K)
No. of teachers**: 93,593
Term: N/A

Elementary school
Age*: 6-11 years old
No. of schools: 19,738
(National/public 19,501 Private 237)
No. of students: 636.9K
(National/public 629K Private 7.8K)
No. of teachers**: 421,936
Term: 6 years

Lower secondary school
Age*: 11-15 years old
No. of schools: 10,222
(National/public 9,441 Private 781)
No. of students: 321.8K
(National/public 298K Private 23.9K)
No. of teachers**: 246,835
Term: 3 years

Upper secondary school
Age*: 15-17 years old
No. of schools: 4,887
(National/public 3,565 Private 1,322)
No. of students: 316.8K
(National/public 214K Private102.8K)
No. of teachers**: 231,342
Term: 3-4 years

Upper secondary school enrollment rate
99%

* Regular enrollment age,
**No. of full-time teachers

School for special needs education

School for special needs education (kindergarten/elementary/lower & upper secondary schools)

Age*: 3-17 years old
No. of schools: 1,146
(National/public 1,132 Private 14)

No. of students: 14.4K
(National/public 14.4K Private 0.1K)
No. of teachers**: 85,336

Term: kindergarten N/A
elementary school 6 years
lower sec. school 3 years
upper sec. school 3 years

Source: FY2019 School Basic Survey (preliminary figures)

3

Overview of Compulsory Educational System

The Japanese Constitution

Article 26 All people shall have the right to receive an equal education corresponding to their ability, as provided by law. The people shall be obligated to have all boys and girls under their protection receive ordinary education as provided for by law. Such compulsory education shall be free.

Basic Act on Education

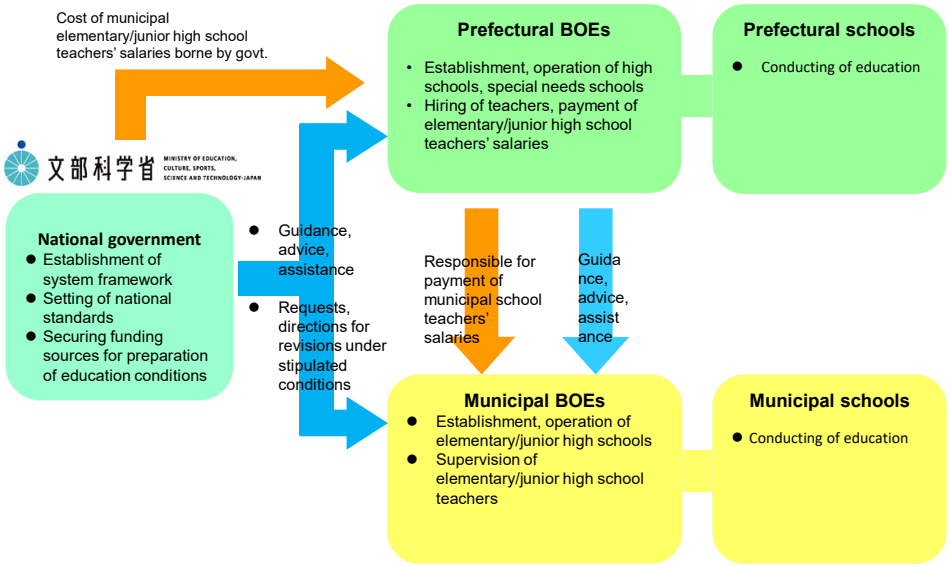
Article 5 (1) Citizens shall be obligated to have children under their protection receive a general education pursuant to the provisions of other acts.

(2) The objectives of general education, given in the form of compulsory education, shall be to cultivate the foundations for an independent life within society while developing the abilities of each individual, and to foster the basic qualities necessary for those who form our state and society.

(3) In order to guarantee the opportunity for compulsory education and ensure adequate standards, the national and Local Prefectual Governments shall assume responsibility for the implementation of compulsory education through appropriate role sharing and mutual cooperation.

(4) No tuition fee shall be charged for compulsory education in schools established by the national and Local Prefectual Governments.

Division of roles of national, prefectural, municipal governments in education administration



Framework of Board of Education system and aims

Framework of BOE system

- BOEs are established in all prefectures and municipalities as administrative committees independent of the prefectural or municipal head of government.
- BOEs decide the basic policy and important matters regarding the administration of education.
- BOEs are, in principle, composed of 5 members :1 full-time superintendent and four part-time lay members. The term for the BOE head is 3 years, and members can be reappointed after four years.
- The superintendent of the BOE manages the overall duties of the BOE, and represents the BOE members (chairs meetings, takes responsibility for execution of specific BOE duties, oversees secretariat). The head of a prefectural or municipal BOE is appointed with the approval of the relevant local assembly.

Aims of BOE

A. Ensuring political neutrality

- It is of paramount importance for the contents of education to be neutral and fair. BOEs must ensure their neutrality and be free from personal value judgments and politically partisan influence.

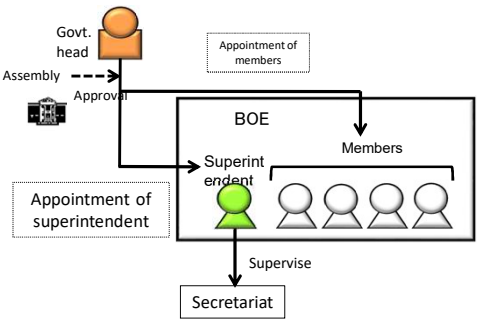
B. Ensuring sustainability, stability

- Particularly in regards to compulsory education, education must be provided stably under a consistent policy throughout the period of learning.

C. Reflecting the will of community residents

- Education is an administrative area of high concern for the community. It should not be under the responsibility of only specialists; education should be provided based on the wide participation of community residents

（BOE organization

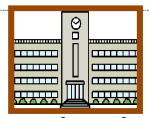


International Comparison of What School Means

There are major differences between what Japan calls *gakko* and what foreign countries call *school*.

→ Unlike teachers in foreign countries who specialize in teaching class, Japanese teachers handle everything from teaching class subjects, to student guidance and club activities.

→ Japanese schools are the nucleus of their local communities and are important for energizing them.

	Intellectual Education 【including course subjects】	Moral Education 【including morality-related and special activities】	Physical Education 【including club activities】
Japan			
Foreign Countries	 School	church, family, etc.	Community (including sports clubs)

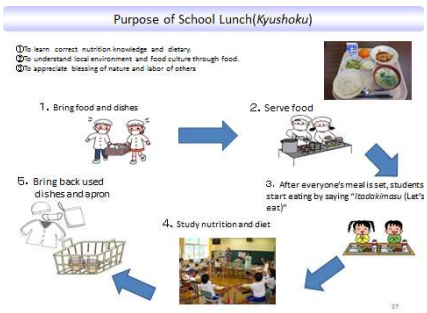
Physical education – In Japan, sports club activities are mainly conducted at schools.
In the United States and Britain, they are done at both schools and in the community, while in Germany, Italy, and Scandinavia, they are mainly held in the community.

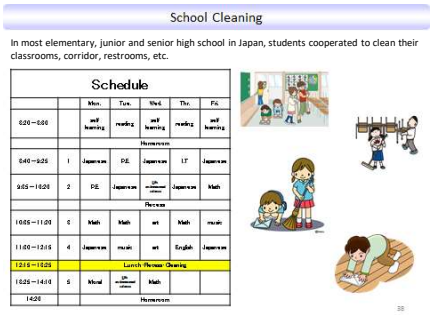
Characteristics of Japan's education

Education that takes a holistic approach

While teachers' tasks are mostly dedicated to class teaching in many other countries, **teachers in Japan integrally engage in teaching class subjects, student guidance, extracurricular club activities and others to provide education that takes a holistic approach for developing Competency .**

This has helped schools in Japan develop so that they can foster the capabilities and qualities necessary for children to meet the demands in any age. <u>This kind of "Japanese-style school education" has been highly praised internationally, and Japanese students have scored at the highest levels in international academic testing, for example, the PISA surveys.</u>





Characteristics of Japan's Education

Lesson study

The lesson study (in-school training) system was born in the Meiji era within the Japanese educational system. As stipulated in the Law for Special Regulations Concerning Educational Public Service Personnel, teachers are requested to continuously engage in research and self-development, and the lesson study system is perceived as one method of such training.

Purpose
1. To provide an opportunity for self-development and training for teachers.
2. To create good relationships within the school by expanding the network among teachers.

Lesson study flow

1. Study teaching materials
2. Conduct demonstration lesson
3. Hold review meeting

National Curriculum Standards

Based on the School Education Act, the national government sets the national curriculum standards for all schools in order to maintain definite levels of education and ensure equal opportunities for quality education for all. National curriculum standards are generally revised every 10 years.

Basic concepts for formulation of school curricula

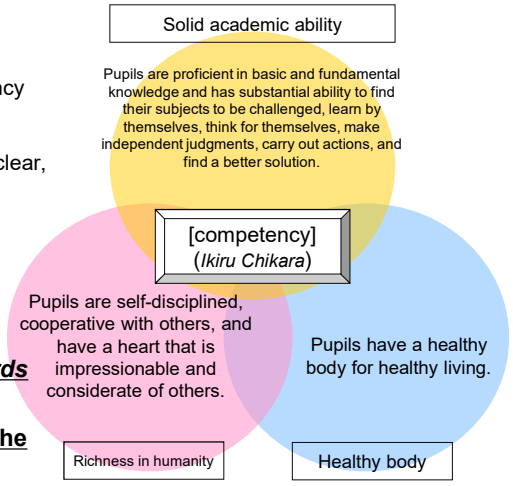
National government	The national government sets the standards for the education curricula formulated by schools to ensure definite standards of education (i.e., the overall educational contents and aims of courses, standard annual number of hours, structure of courses, etc.)
Boards of education (school establishers)	Boards of education set regulations for basic matters related to the management of schools, including the curricula (i.e., the school year, school terms, holidays, division of school administrative duties, procedures for making curricula and use of textbooks, etc.)
Schools (Principals)	In accordance with the national curriculum standards, schools make and execute the educational curricula to respond to the actual situation of students, the school, and the community, adding their own originality and ingenuity (i.e., setting of educational aims, organization of lesson contents, allotment of classroom hours, etc.)

National Curriculum Standards

<Ideals of the current national curriculum standards>

- In the era of "knowledge-based society", it is increasingly important to cultivate a competency required for living in the these society.
- In the amended Basic Act on Education and elsewhere, the ideals of education are made clear, and the amended Basic Act on Education prescribes the important elements of learning ability.

The current *national curriculum standards* retains previous ideals and cultivates a "competency (*ikiru chikara*)" based on the amended Basic Act on Education.



To more effectively cultivate a competency (*ikiru chikara*) with a solid academic ability, richness in humanity, and a healthy body as necessary for the society of the future.

Developments in the national curriculum standards①

1958-1960 Revision

Clarifying the nature of national curriculum standards as the curriculum standard
(Introduced the period of moral education, promoted basic scholastic ability, and enhanced science and technology education) (Systematic learning was emphasized)

(Implemented)
Elementary school: academic year 1961, Junior high school: academic year 1962, High school: academic year 1963 (gradual implementation)

1968-1970 Revision

Further improving educational content ("Modernization of educational content")
(Introduced educational content in line with the progressing times) (Introduced the concept of sets in arithmetic, etc.)

(Implemented)
Elementary school: academic year 1971, Junior high school: academic year 1972, High school: academic year 1973 (gradual implementation)

1977-1978 Revision

Realizing a relaxed and fulfilling school life = Adjusting the burden of learning
(Objectives and content were trimmed down to the core in each subject)

(Implemented)
Elementary school: academic year 1980, Junior high school: academic year 1981, High school: academic year 1982 (gradual implementation)

1989 Revision

Nurturing people with a rich mind who can willingly respond to changes in society
(Introduced Life Environmental Studies and promoted moral education)

(Implemented)
Elementary school: academic year 1992, Junior high school: academic year 1993, High school: academic year 1994 (gradual implementation)

1998-1999 Revision

Ensuring students acquire the fundamentals and basics while cultivating a "Competency *(Ikiru Chikara)*" such as the ability to learn and think for themselves
(Carefully selected educational contents and introduced the "Period of Integrated Studies")

(Implemented)
Elementary school: academic year 2002, Junior high school: academic year 2002, High school: academic year 2003 (gradual implementation)

2003 Partial Revision

Further achieving the aims of the national curriculum standards (e.g. defined that teachers are allowed to teach content not stated in the national curriculum standards and added the following content in the examples of individual-oriented teaching: homogeneous grouping based on students' abilities at elementary schools, and supplemental and developmental learning at elementary and junior high schools)

12

Developments in the national curriculum standards②

2008-2009 Revision

Cultivating a "Competencies for living (*Ikiru Chikara*)," balancing between acquiring fundamental/basic knowledge and skills and balancing development of the abilities to think, make decisions, and express oneself
(Increased the number of class hours, improved teaching content, and introduced Foreign Language Activities at elementary schools)

(Implemented)
Elementary school: academic year 2011, Junior high school: academic year 2012, High school: academic year 2013 (yearly implementation)
* Advance implementation from academic year 2009 at elementary and junior high schools and from academic year 2010 at high schools

2015 Partial Revision

Defining moral education as "a special subject"
(Improved moral education to support students to face, think and discuss problems with more than one right answer from a moral perspective.)

(Implemented) Elementary school: academic year 2018, Junior high school: academic year 2019

2018-2019 Revision

Classifying competencies to cultivate in three categories of "Knowledge and skills", "Abilities to think, make judgement and express themselves" and "Motivation to learn, and humanity" in order to foster "Competencies for living (*Ikiru Chikara*)" in students, and realizing the idea of "Curriculum open to society"
(Improved classes from the perspective of active leaning, promoted curriculum management and enhanced foreign language education)

(Implemented)
Elementary school: academic year 2020, Junior high school: academic year 2021, High school: academic year 2022(yearly implementation)
* Advance implementation from academic year 2018 at elementary and junior high schools and from academic year 2019 at high schools

13

Direction of the National Curriculum Standards Revisions

Fostering competecies necessary for the new era and enhancing learning evaluations

Cultivation of **human nature and the ability to pursue learning** so that one strives to apply learning to life and society

Acquisition of the **knowledge and skills** necessary to live and work

Developing the **abilities to think, make decisions, and express oneself** to be able to respond to unprecedented situations

What can be achieved

By sharing the goal of bringing about a better society through improved school education, we will realize "**curricula that are open to society**," that develop the qualities and abilities of students to become creators of the future in conjunction with society

Realization of "**curriculum management**" at each school

What to learn

Introducing new subjects and subject subdivisions, and reviewing objectives and content based on the qualities and abilities necessary for the new era

Adopt foreign language education as a subject at elementary schools and introduce a new subject "Public " at high schools

Clarify the qualities and abilities to be developed in each subject and show the goals and content in a structured manner

The learning content will not be reduced*

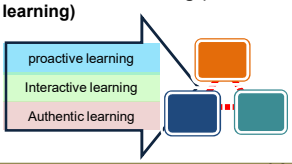
*With regard to high school education, comprehensive reforms to build connections between high schools and universities will be carried out in order to overcome the current system for selecting university entrants, which involves the simple memorizing of trivial knowledge.

How to learn

Improving the learning process from the perspective of proactive, interactive, and Authentic learning (active learning)

Develop the qualities and abilities needed for the new era, including acquisition of the knowledge and skills necessary to live and work

Improve the quality of the learning process to achieve quality understanding without reducing the amount of knowledge



14

Proactive, interactive and authentic learning (improving classes from the perspective of active learning)

Improve classes from the perspective of *proactive, interactive and authentic learning* in order to enable students to achieve high-quality learning through school education, to understand educational contents deeply, gain competencies, and engage in active learning throughout their lives

【Proactive learning】

Whether students achieve "*proactive learning*" that is to learn interestingly, to find relation between learning and one's carrier development, to undertake learning with patience and to review one's learning activities for the next action.

Proactive learning

Interactive learning

Authentic learning

Cultivation of "**Readiness for learning, humanities, etc.**"

Acquisition of "**knowledge and skills**" which are usable in life

Fostering of "**ability to think, to make decisions and to express**" with which we can deal with unknown situation

【Interactive learning】

Whether students achieve "*interactive learning*" that widens one's ways of thinking through cooperation with other students, interaction with teachers and people in community and hints from historical thinkers.

【Authentic learning】

Whether students achieve *"authentic learning"* that leads to find and solve problems, to shape and express one's thoughts and to produce and create things based on the thoughts as they utilize "way of seeing and thinking" which is acquired through learning each subject.

Basic Framework to Enhance Quality and Abilities of Teachers

Enhancing the quality and abilities of teachers: training, employment and development

- Training provides by universities in principle
  - Foster minimum skills needed to assume the responsibilities of a homeroom teacher, teach subjects and guide students upon employment by acquiring subject-based training and practical teaching skills in faculties certified to teach teacher-training courses.
- Establishment of professional graduate schools for teacher education
  - Enhance teacher-training courses in graduate schools in order to provide advanced, practical teacher training.

Training

Develop environment which enhances abilities throughout teaching career

Employment — Development

- Teacher recruitment and selection carried out by boards of education of prefectures and designated cities
- Further promotion of multidimensional assessments
  - Focus more on interview and demonstration lesson performance
  - Assess various social experiences (other than teaching)

- Professional development provided by prefectural boards of education
  - Professional development for new teachers, mid-career teachers, etc.
- Professional development at national level (National Institute for School Teachers and Staff Development (NITS))
  - School management training for teachers who play central role in education at each region
  - Training on urgent key issues, etc.

Appropriate HR management

- Effective HR management system for teachers performing unsatisfactorily
- Teacher evaluation system
- MEXT Outstanding Teacher Award

Teaching certificate renewal system

- Provide opportunity to acquire latest knowledge and skills for teachers to gain confidence and pride towards their work and respect and trust from the community.
- Establish a ten-year validity period for teaching certificates.

Comprehensive Reform of Teacher Training, Employment and Development

○ Training, Employment and Development Measures according to stage

Development / Employment / Training

Veteran stage

Mid-career stage

One to a few years

Employment stage

Training stage

【Reform: Managerial position training program】
- Develop training program that enhances managerial skills

【Reform: 10-year career training program】 Law revision
→Establish mid-career training program
- Flexibility in training period
- Clarify objectives and details (develop mid-level leaders)

【Reform: New teacher training program】
- Promote mentorship training (team training)
- Enhance comprehensive early stage training not limited to new teachers

【Reform of certificate renewal course】
- Offer elective and compulsory courses in order to respond to current educational issues

- Increase teacher training academies for smooth hiring of new teachers
- Review possibility of joint development of teacher recruitment exam
- Secure a diversity of human resources by employing the special teaching license system, etc.

- Enhance course contents in response to emerging issues (English, moral education, ICT, special needs education) and lesson improvements which takes in the active learning perspective.
- Implement school internship
- Integrate subject-based training and practical teaching skills Law revision
- Create a national core curriculum for the teacher-training course

Indices for quality enhancement

【Basis that support current training program】 Law revision
- Strengthen NITS's functions (Promote and support training programs which respond to lesson improvements that reflect the active learning perspective)
- Improve quality and abilities of teachers through professional graduate schools for teacher education (promote linking training to credit by collaborating with professional graduate schools for teacher education)
- Ensure number of teachers necessary for training opportunities

○ Improve system to support teachers who continue to study Law revision
- Establish council for boards of education and universities
- Develop benchmarks for quality enhancement of principals and teachers and teacher training programs

Law revision ・・・Measures based on the partial revision of the Special Rules for the Public Educational Personnel and Staff Act (Nov. 2019)

Main Efforts for the Promotion of Comprehensive Reform of Teacher Training, Employment and Development

Reform: training, employment and development

○ Enhance appeal of teaching profession (Employ diverse human resources from the private sector (e.g., from the workstyle-reform and employment-ice age generations))
○ Provide guidance and advice that would enable the PDCA cycle (based on quality enhancement benchmarks) to function appropriately in each region (In particular, the NITS will study and analyze how the benchmarks are being used in each region and share the results)

Reform: training

○ In line with the revision of the Education Personnel Certification Act, screen all universities which provide teacher-training courses and certify courses as appropriate. Enhanced teacher-training courses offered from April, 2019.
*No. of universities with recertified courses University: approx. 600 Graduate school: approx. 400 Junior college: approx. 200

○ Establishment of professional graduate schools for teacher education in each province* completed by FY2018.
(*excluding Tottori prefecture overseen by Shimane University)

Reform: employment

○ Collect and share successful examples and make positive use of the special teaching license system in order to reform the employment selection process of those with the power of appointment.

○ Review possibility of joint development of teacher recruitment exam.

Reform: development

○ Encourage board of educations to conduct training combined with certificate renewal courses in order to reduce the burden of in-service teachers.

○ Actively promote the initiatives of the NITS which serves as the national hub that provides comprehensive support to teachers.
(distribute coursework videos that can be used for in-school training, organize regional bases in collaboration with universities in each region, provide training videos for the Open University of Japan and National Institute of Special Needs Education)

○ Provide support to local governments in order to conduct effective training. (In particular, NITS will study and analyze proactive, dialogue-based deep learning and share the results)

ご清聴ありがとうございました。

Thank you very much for your attention

文部科学省

MEXT

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
IENCE AND TECHNOLOGY-JAP

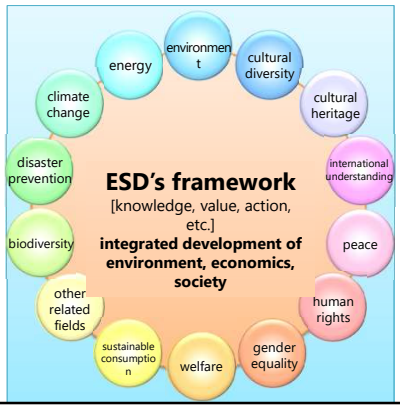
Promotion of ESD through ASPnet Schools in JAPAN

FUKUMOTO Hitoshi
Japanese National Commission for UNESCO (Japan Natcom, JNCU)
ASPnet National Coordinator

ESD in Japan

ESD (Education for Sustainable Development) is education to cultivate leaders who will help build a sustainable society for the future.

This is in the form of learning and activities whose goal is to have people view the various problems of modern society to be their own problems and to endeavor to tackle these problems in their immediate environment, and as a result, to produce new values and actions which will lead to solutions to these issues, and thereby create a sustainable society.



Global problems such as environmental destruction, poverty, terrorism, climate change, and natural disasters are on the rise and are becoming more complicated, leading to efforts towards the creation of sustainable societies taking on an even greater role throughout the world.

ESD educates people to perceive global problems to be their own problems, and to take action in their immediate environment (think globally, act locally), and refers to learning and activities, which aim to generate new values and behaviors that will help solve these problems, and as a result, create sustainable societies.

In other words

ESD is education that fosters the leadership needed to build sustainable societies.

21

Japan's Contributions towards promoting ESD activities in Japan and abroad (1)

Japan has been promoting ESD in all the educational levels from elementary schools to universities. **The fostering of the "creators of a sustainable society" is incorporated into the new National Curriculum Standards and Third Basic Plan for Promotion of Education as a key theme.**

New National Curriculum Guidelines

(Issued in March 2017)

【Preamble】

All schools from now will seek to enable each and every child (student) to recognize his or her own worth and potential, and while respecting the value and worth of all others and engaging with a diverse range of people, to overcome various social transformations, open up a rich life for themselves, and **become creators of sustainable societies**.

【Chapter 1 General Principles】

1. Fundamentals of elementary (junior high school) education and role of curriculum

1-3. …in aiming to equip children, who **are expected to become creators of sustainable societies**, with rich creativity and foster in them a zest for life, the curriculum will clarify the qualities and capabilities that schools will seek to foster through the entire school education as well as through each subject, moral education class…period for integrated study, special activities…and will enhance the education activities.

Third Basic Plan for the Promotion of Education

(Approved by the Cabinet in June 2018)

Section 2

Aims and Measures for Education Policy in the Coming Five Years

＜Mainly at primary and secondary education stages＞

MEXT will enhance the activities of **UNESCO Associated Schools, which are considered as the bases for ESD in Japan**, and will communicate and spread their successful examples throughout the country. Moreover, MEXT will promote **the implementation** and **diffusion of ESD** and exchanges among schools, as well as deepen the reach of ESD. Through these initiatives, leaders who will **create sustainable societies will be fostered**.

＜Mainly at higher education stage＞

MEXT **will facilitate the implementation of ESD** through collaboration among a variety of regional stakeholders (schools, boards of education, universities, companies, NPOs, community centers, etc.), as well as **deepen the reach of ESD** so as to contribute to the realization of the SDGs through various interdisciplinary and other initiatives. Through these efforts, students will be encouraged to view global problems as their own, develop a mindset to take action nearby, and **become leaders for the creation of sustainable societies**.

22

Japan's Contributions towards promoting ESD activities in Japan and abroad (2)

Japan has been also promoting ESD internationally by actively participating in the establishment of new ESD implementation framework led by UNESCO as the lead agency for SDG4.

● United Nations Decade of Education for Sustainable Development (UNDESD) (2005-2014)

● Global Action Programme on Education for Sustainable Development (2015-2019)

→**The World Conference on Education for Sustainable Development (ESD) was held in** Aichi-Nagoya, **Japan** and the Global Action Programme on ESD (GAP) was officially announced in 2014 as the final year of UNDESD.

● ESD for 2030 (2020-2030)

→The new ESD implementation framework towards achieving the SDGs in 2030, will be started from next year. **Japan is one of the main countries (including Germany and Kenya) related to the launch of ESD for 2030**. The resolution on ESD for 2030 will be officially adopted in the 40th session of UNESCO General Conference and the 74th UN General Assembly. Japan held the pre-launch meeting on ESD for 2030 in September 5th 2019.

23

"Education for Sustainable Development (ESD)" contributing to achievement of SDGs

What is ESD?

- ESD is education that develops children's autonomous ability to see global issues impacting modern society as their own and to think of solutions by themselves with the aim of fostering leaders who will make sustainable societies. ESD develops students' capability to act and brings about a transformation of values and behaviors.
- ESD engages students in an interdisciplinary and holistic way in individual areas such as international understanding, the environment, cultural diversity, human rights, and peace from the perspective of sustainable development.

ESD contributes to achieve the all 17 SDGs by fostering people who can build sustainable societies.

24

Sustainable Development Goals（SDGs）

25

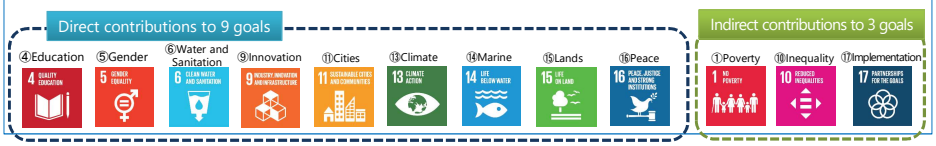
About UNESCO and SDGs

1. UNESCO and SDG4 (Education)

- **UNESCO is the only professional institute related to education in the UN**
- UNESCO plays a key role in implementing SDG4（Goal 4: Education）

2. Contributions to SDGs through UNESCO projects

- UNESCO has been contributing **directly to 9 goals including Goal 4** and indirectly to other 3 goals through its projects.



"UNESCO moving forward the 2030 agenda for sustainable development"（ユネスコ作成）より

3. Contributions to SDGs through Education・ESD

- **UNESCO contributes to all SGD goals by nurturing talents for building sustainable society through Education・ESD.**
  ※UNESCO is the leading institute of the ESD of the UN.

→ UNESCO makes huge contributions to implementing SDGs!

26

UNESCO Associated Schools Network as hubs to promote ESD in Japan

MEXT and the Japanese National Commission for UNESCO have positioned **the UNESCO Associated Schools Network (ASPnet) as hubs to promote ESD** and are supporting Japanese ASPnet schools' activities.

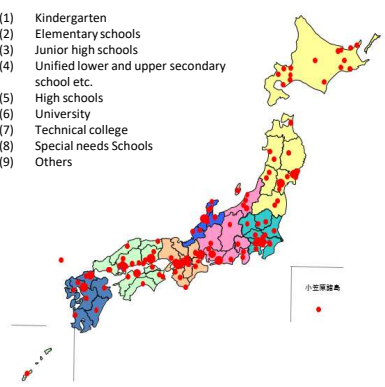
Japan: 1,116 schools
(1) 21, (2) 552, (3) 279,
(4) 60, (5) 155, (6) 5,
(7) 1, (8) 12, (9) 31

Kinki Area：139 schools
(1) 5, (2) 50, (3) 26,
(4) 13, (5) 33, (6) 2, (9) 10

Chugoku and Shikoku Area
：178 shools
(1) 1, (2) 92, (3) 39,
(4) 9, (5) 32,
(8) 2, (9) 3

Kyushu Area：68 shools
(2) 32, (3) 22,
(5) 11, (8) 1, (9) 2

(1) Kindergarten
(2) Elementary schools
(3) Junior high schools
(4) Unified lower and upper secondary school etc.
(5) High schools
(6) University
(7) Technical college
(8) Special needs Schools
(9) Others



Hokkaido and Tohoku Area
：162 schools
(1) 8, (2) 77, (3) 42,
(4) 4, (5) 25, (6) 1,
(8) 1, (9) 4

Hokuriku Area：119 schools
(2) 84, (3) 32,
(5) 2, (7) 1

Kanto Area：172 schools
(1) 2, (2) 75, (3) 38,
(4) 26, (5) 22,
(6) 1, (8) 2, (9) 6

Chubu Area：278 schools
(1) 5, (2) 142, (3) 80,
(4) 8, (5) 30, (6) 1,
(8) 6, (9) 6

Ref.: Number of ASPnet in Japan (Unit: schools)

FY 1956	FY 1960	FY 1965	FY 1970	FY 1980	FY 2000	FY 2005	FY 2007	FY 2008	FY 2009	FY 2010	FY 2011	FY 2012	FY 2013	FY 2014	FY 2015	FY 2016	FY 2017	FY 2018
6	27	22	25	21	20	19	24	78	152	277	367	550	705	913	939	1008	1034	1116

27

UNESCO Associated school as the hubs to promote ESD
ESD contributes to quality education

Initiatives spearheaded by UNESCO Associated Schools have led to an accumulation of ESD best practices…..

UNESCO Associated Schools

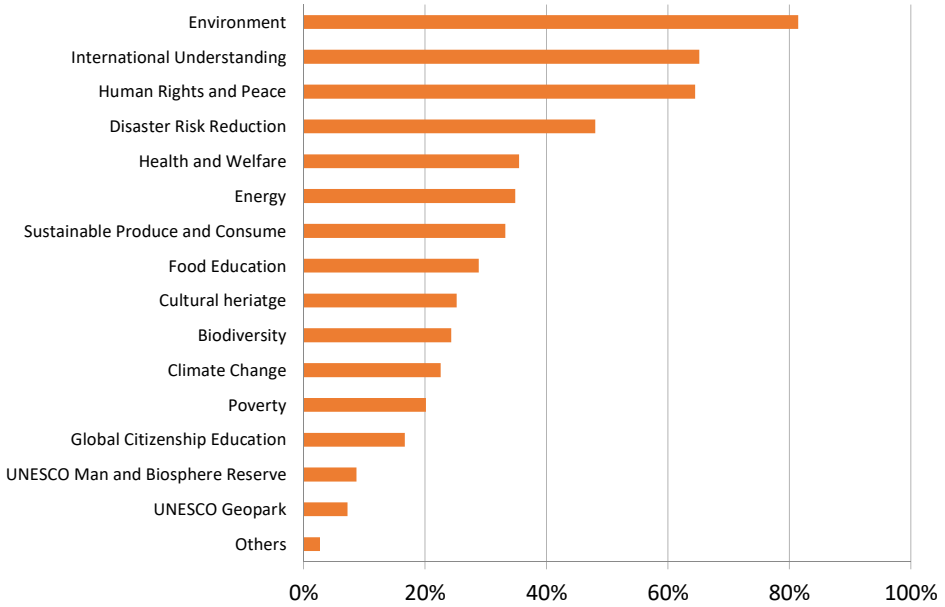
- ◆ Actively use the network to share best practices and for peer-learning.
- ◆ Sharing best practices is important in order to pass on teaching method to the next generation teachers.

ESD contributes to quality education

- ◆ By integrating various themes that had been taught separately with ESD an perspectives, students' learning became interdisciplinary and practical with closer links to local issues.
- ◆ Experience-based and problem-solving learning is more often used, encouraging more student-centered and participatory learning.

28

Areas which Japanese ASPnet schools especially focus on



Source: National Survey on ASPnet Schools, Jan.2018, JNCU

29

Case Study: Yanagawa Elementary School, Kōtō Ward

- Joined UNESCO ASPnet in 2011
- Received Japan SDGs special award in 2017
- Connected each subject/unit making use of ESD calendar
- Established integrated interdisciplinary curriculum management methods from the perspectives of the environment, human rights, multicultural understanding and learning skills

Environmental Education | Multicultural Understanding | Human Rights Education | Learning Skill

ESD calendar

Subjects	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec	Jan	Feb	Mar
Japanese	Learning how to make sentences using graphs and tables.			Making graphs and tables		Hometown after 100 years		Story about a great man who saved villagers from *Tsunami*
Math	Knowing mechanism of natural disasters			Summarizing findings with percentages		Percentages and graphs		
Science	Changes of typhoons and the weather			Functions of streams				
Social Study			Making use of disaster information			Making full use of information		Disaster prevention
General Study	Deepening learning by connections			Let us prepare for earthquake emergencies!				Mechanism of disaster prevention
Special Activities			Knowing the damage of huge earthquake in *Kanto*	Knowing school history		Yanagawa festival		Presenting learning outcomes

30

Case Study: Yanagawa Elementary School, Kōtō Ward

Revision of the National Curriculum Standards in view
Goal 4 Quality Education

E S D

Emphasizing on;
Proactive and problem based learning (Instruction that sparks learning);
Subject-crosscutting, integrated learning (Utilization of ESD Calendar); and
Dialogical and cooperative learning (Set an interactive space)

Environment				Human Rights		Multi-Cultural Understanding (Int'l understanding)	
2	**Goal 2 Zero Hunger** 3rd grade: "Seeing world through food" 5th grade: "Food production in the future and us"	6	**Goal 6 Clean Water and Sanitation** 4th grade: "Save the water – Earth Ranger"	1	**Goal 1 No Poverty** 3rd grade: "Seeing world through food" 5th grade: "Food production in the future and us"	10	**Goal 10Reduced Inequalities** 2nd grade: "Exploring the town," and "Discovering the secrets of the town" 3rd grade: "Exploring old ways of living" 4th grade: "Discover Fukagawa future heritages" 6th grade: "Tell stories about Edo and Fukagawa" ※Regardless of individuals or nations, mutual understanding is the base of the equal friendship. It is the multi- cultural understanding that formulate the base of the tolerance for differences, and equal human relationships.
7	**Goal 7 Affordable and Clean Energy** 2nd grade: "My moving toys" 5th grade: "Kids' action on carbon minus"	9	**Goal 9 Industry, Innovation and Infrastructure** 5th grade: "Participating Eco-products exhibition," and "Reconsidering engineering from environmental perspectives"	3	**Goal 3 Good Health and Well-being** 4th grade: "Scaling up kindness (Wheelchair basket, and care experience)," and "I'm growing up(half-coming of age)"		
11	**Goal 11 Sustainable Cities and Communities** 3rd grade: "Creating local safety map" 5th grade: "Let's prepare for an earthquake now!"	12	**Goal 12 Responsible Consumption and Production** 4th grade: "Waste and our daily life" 5th grade: "Food production in the future and us"	5	**Goal 5 Gender Equality** 2nd grade: "Jump for tomorrow" 4th grade: "Signals from heart, read with hand and mind"		
13	**Goal 13 Climate Action** 5th grade: "Kids' action on carbon minus," "My home town in 100 years," and "Global warming/vanishing forests"	15	**Goal 15 Life on Land** 1st grade: "Become friends with living things," and "Have fun in Autumn" 2nd grade: "Baby Crayfish," and "Growing my tasty veggies" 3rd grade: "Saving dragonfly larvae" All grades: "Creating Haiku"	8	**Goal 8 Decent Work and Economic Growth** 6th grade: "Flying to the future (from the perspectives of career education)"	17	**Goal 17 Partnerships for the Goals** 2nd grade: "Jump for tomorrow" 4th grade: "Fun time with international students 6th grade: "Know the world and send out messages on what we can" **Domestic & international exchange and communication as a whole school**
14	**Goal 14 Life below Water** 5th grade: "Fish industry in Japan," and "Seaside school in Iwai (Swimming marathon, Beach seining, and Plankton)"			16	**Goal 16 Peach, Justice and Strong Institutions** 6th grade: "Politics that realizes our hopes," and "Know the world and send out messages on what we can"		

31

Case Study : Ōmuta ESD consortium

- Ōmuta city has developed 'Ōmuta SDGs', selected several goals of SDGs and clarified children's competencies to be nurtured for achieving the goals based on former ESD practices.

Focus on 'Ōmuta SDGs'

Sustainable Community Development in Ōmuta

【Ōmuta SDGs】

< 重点目標 > < Intensive Goals >

3 GOOD HEALTH AND WELL-BEING
7 AFFORDABLE AND CLEAN ENERGY
11 SUSTAINABLE CITIES AND COMMUNITIES
12 RESPONSIBLE CONSUMPTION AND PRODUCTION
13 CLIMATE ACTION
14 LIFE BELOW WATER
15 LIFE ON LAND
16 PEACE, JUSTICE AND STRONG INSTITUTIONS

< 基盤目標 > < Basic Goals >

Declaration of UNESCO school day

17 PARTNERSHIPS FOR THE GOALS

Schools in Omuta-city joined UNESCO ASPnet on January 17th in 2012.

- We value the links between people.
- We spread our link from schools and communities to the world.
- We value the link between the past, the present and the future.
- We continuously learn and take actions for a bright future.

School Education Promotion Plan

4 QUALITY EDUCATION

Basic Principle: "Making a city starts from nurturing the people and the community."

We promote ESD and nurture children who have big dreams to make a bright future. They are called "*Omutakko*".

"Ōmutakko"
Ō: having a big dream and willing to create a bright future
Mu: Challenging difficulties
Ta: Brave spirit and strong body

Characteristics of Ōmuta-city

【tasks】
・Aging population
・Decline of coal industry

【properties】
・Energy and environment (Overcoming environmental pollution)
・World heritage (Industry revolution in the Meiji era)
・Marine education (Ariake sea and Miike habor)

15 LIFE ON LAND

15. Protection of rich land

Promote protection and recovery of ecology, sustainable land usages, forest management, prevent desertification and protect biodiversity.

◎ From SDG targets

Target 15.1: Ensure conservation, restoration and sustainable use of terrestrial and inland freshwater ecosystems and their services, in particular forests, wetlands, mountains and drylands.
Target 15.4: Ensure conservation of mountain ecosystems, including their biodiversity, to enhance their capacity to provide benefits essential for sustainable development.

○ ★ Integrated community development plan ★ School Education promotion plan)

★Bustle: To make use of community treasure.
Town planning utilizing the nature and the competitiveness of agriculture and fisheries
★Life: Harmony between town and nature.
Town caring for the earth and nature.
★Development of unique school education: Promotion of ESD
Promotion of educational activities to get close to and protect nature

○ Actions at schools in Ōmuta city

Park visit (Ōmuta central elementary school) | Research and protection (Shirakawa elementary school) | Cherry blossom project (Yoshino elementary school) | Rice growing project (Jyonai elementary school)

○ What kind of children do we nurture?

Children who can spontaneously take actions for sustaining the relationship between the people and the land.
・Able to understand local nature such as mountains, rivers and reclaimed land.
・Having the ability to think about constructing a sustainable society, and ways of using land to live together with the natural environment.
・Spontaneously take actions for protecting nature.

32

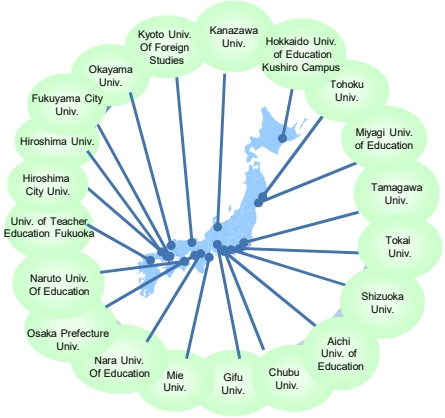
ASP UnivNet

ASPUnivNet – Inter-University Network to support the UNESCO Associated Schools Project

Higher education institutions have the ability to provide superior education resources relating to ESD. Utilizing this ability, an inter-university network named the Inter-University Network to Support the UNESCO Associated Schools Project (ASPUnivNet) was created as a partner to support the activities of the UNESCO Associated Schools.

Details of the activities

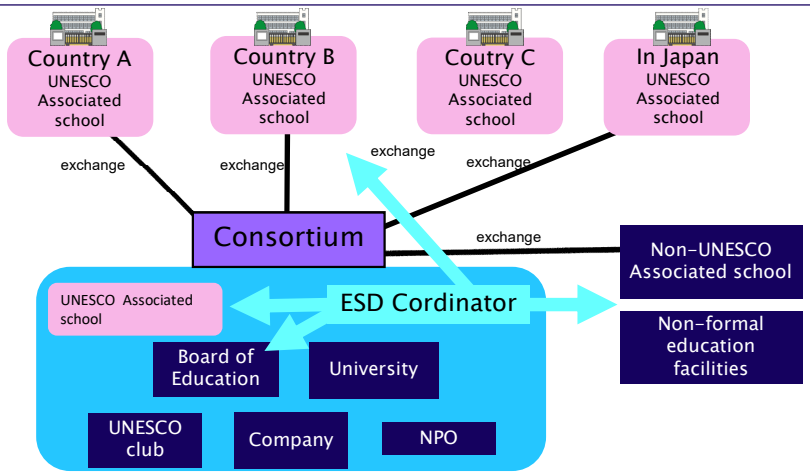
Advice and support offered to the ASPNet Schools as an approach which is characteristic of Japan.
① Support offered to schools to become an ASPNet School (application and activities)
② Intellectual resources of the universities are made available for the activities of the UNESCO Associated Schools
③ Support given to create a network between the UNESCO Associated Schools both in Japan and other countries
④ Promotion of cooperation between the educational institutions in the region and the UNESCO Associated Schools



33

ESD Consortium

MEXT funds the "ESD consortium" which is composed of the boards of education, universities, UNESCO-clubs together with UNESCO ASPnet schools. The consortiums are expected to promote the exchange among schools internally and internationally. Each consortium are requested to have ESD Coordinator which is expected to promote cooperation among consortium members and strengthens the ties with non UNESCO Associated schools and non-formal education facilities.



34

Nationwide ESD & ESD-SDGs Consortium

- Various actions were taken all over the country from the regional-based ESD promotion until nationwide ESD practice focused on specific themes by the representative organization (Universities, Board of Education, NGOs, etc.) cooperating with various ESD/SDGs-related organizations such as schools, companies, Chambers of Commerce and Industry, UNESCO Associations, specialized agencies.

Consortium adopted in 2018

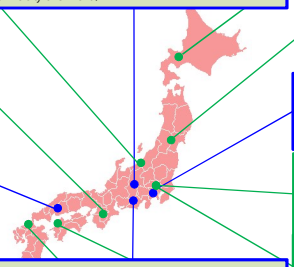
・ESD-SDGs Consortium on making textbooks of modern heritage in Aga-machi
Making primary / secondary-level textbooks on the bright and somber sides of modern heritage of Aga-machi such as Niigata-Minamata disease.
(Aganogawa Environmental School)

・ESD-SDGs Consortium at Nara University of Education
'Training for promoting ESD', which visualizes ESD class
"Training for deepening ESD', which aims at developing teachers who can teach ESD
(Nara University of Education)

・Hiroshima ESD Consortium
'All Hiroshima-style' consortium which develops teachers and students who can contribute to world peace as global talents (Hiroshima University)

【ESD Consortium adopted from 2014–2017】
・Tohoku ESD/UNESCO ASPnet Consortium
・Hokuriku ESD Promotion Consortium
・Mie ESD Consortium
・Kinki ESD Consortium
・Ōmuta ESD Consortium
・Okayama ESD Consortium
・Chiba ESD Consortium
・Aichi ESD Consortium
・Niihama ESD Consortium

・Shinshu ESD Consortium
Advocated ESD activities utilizing geographical characteristics of the Nagano Prefecture, linking activities of ASPnet and UNESCO eco park.
(University of Shinshu)



・ESD・FujinokuniGlobalizationConsortium
Cooperate with various organizations and communities to take actions for ESD / Internationalization, research knowledge and built sustainable networks between schools and local communities (University of Shizuoka)

・Ōmuta SDGs/ESD Consortium
Built educational administrative networks for fulfilling ESD and developed programs for nurturing ESD master teachers.
(Board of Education, Ōmuta city)

・Sapporo-Central Hokkaido ESD-SDGs Consortium
Schools in central Hokkaido built networks between college students and communities that tackle regional challenges to implement ESD practices.
(Hokkaido University)

・Northeast ESD-SDGs Consortium
Spread ESD/SDGs activities in the northeast area by cooperating with the northeast ESD support center.
(Miyagi University of Education)

・Yokohama ESD Consortium
Implementing ESD by reviewing curriculum design and school management from the ESD perspective of "reviewing, connecting, challenging from the local to the world"
(Board of Education, Yokohama city)

・ESD-SDGs National Consortium starting from sustainable schools
Aimed at the nationwide promotion of the whole-school approach promoted by UNESCO with 24 sustainable schools in Japan. (Asia-pacific Cultural Centre for UNESCO)

・Geo park ESD-SDGs Consortium
Took actions for developing an ESD practice model by utilizing the geopark and its implementation by education and geopark staff nationwide. (Japan Geo Park Network)

・Niihama ESD-SDGs Consortium
Enhanced the local ESD, cooperated with various related institutions and promoted linkage between neighbouring firms and local communities implementing SDGs.
(Board of Education, Niihama city)

Blue : Project of ESD Consortium

35

Thank you for your attention !

Your everyday life will make a future.

日本ユネスコ国内委員会
Japanese National Commission for UNESCO

3-2-2 Kasumigaseki, Chiyoda-ku, TOKYO, JAPAN, 100-8959
http://www.mext.go.jp/unesco/
e-mail:jpnatcom@mext.go.jp

付録２　インド教職員　　報告会発表資料

Invitation Programme for Teachers from India

13th – 20th October 2019

Debriefing

文部科学省委託「2019年度初等中等教職員国際交流事業」

インド教職員招へいプログラム

2019年10月13日～20日

Ministry of Human Resource Development
Government of India

文部科学省 MEXT

Connecting the people of the Asia-Pacific, fostering learning
ACCU

CEE
Centre for Environment Education

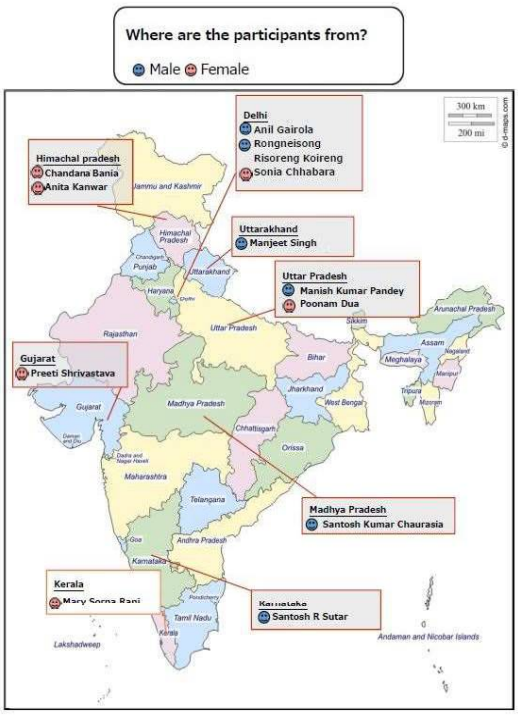
CONTENTS

- Overview
- Objectives
- Expectations
- Learning outcomes
- Key take away
- Best practices
- Suggestions
- Proposals to MHRD
- Conclusion

Overview

No. of delegates : 12
Representing : 8 States and 1 UT
Institutions : 4 key institution of MHRD

- Department of School Education and Literacy
- National Council of Educational Research & Training
- Central Board of Secondary Education
- Kendriya Vidyalaya Sangathan
- Navodaya Vidyalaya Samiti
- Central Tibetan Schools Administration



Objectives

Provide opportunity for Indian teachers to visit schools and other educational and cultural institutions of Japan enabling exchange between teachers and students

Deepen understanding the school education system of each country between teachers of India and Japan

Enable the teachers from India and Japan to disseminate their learning

Foster sustainable international exchange after the programme to contribute to friendship and mutual understanding between India and Japan.

Expectations to Know about

Japanese curriculum

Learning teaching methodology

Inculcation of values

Tradition and culture

Concept of vocational education

English language development

Utilization of ICT tools

Skill Competency

- Know about ACCU, MEXT, ESD practices in Japan
- Regarding organization of programme
- Explore govt. Schools in japan to know their teaching learning process and infrastructure facilities available for hands on activities and co- curricular initiatives such as sports, music, art etc
- Opportunity to interact with concerned authorities, Japanese teachers & students
- Relish Japanese food; Explore Tokyo climate and Japanese culture, Dance and Urban life of japan including shopping.

Day 1 : Programme Orientation

14/10/2019

Context

- Welcome by Indian Embassy
- Orientation about program by ACCU

Learning experiences

- Cleanliness and Discipline
- Beautiful and balanced landscape
- Humble and friendly people
- A feeling of home away from home

Day 2 : Visit to MEXT

15/10/2019

Context

- Presentation by the MEXT officials
  - UNESCO affiliation of schools promoting ESD
  - Case study on ESD promotion
  - Overview of Japanese school system
  - National curriculum standard
  - Enhancing quality and ability of teachers such as qualification, certification, training requirement, recertification for the training programme

Learning / Experience

- Appreciated the overall educational systems of Japan with a focus on ESD, Competency based national curriculum
- Develop environment which enhances abilities through well defined programmes at different levels
- Amazing exposure to traditional and urban culture within Tokyo

DAY 3 : VISIT MATSUDO INTERNATIONAL HIGH SCHOOL

16/10/2019

- Warm welcome by principal and staff
- Presentation by Indian delegates on
  - ✓ Indian mathematics
  - ✓ India japan relations
  - ✓ Religion and festivals in India
- Question answer session
- Final meeting with the principal

Learning's / Experiences

- Overwhelmed by our first visit to a Japanese school
- Courteous and hospitable staff
- Cleanliness of the school and surroundings
- Accessible and students friendly learning resources
- The maximum followed "we help each other"

DAY 4: VISIT TO FUCHU DAISAN PRIMARY SCHOOL

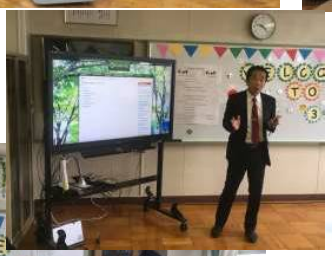
17/10/2019

Context

- Greetings from the whole school through "Namastey"
- Live classroom observation and experience (English, Japanese , theatre and physical education)
- Interaction with representatives of board of education
- Cultural performance
- Sharing lunch with students
- Question answer session

Learning's / Experiences

- Care taken to inform all students & staff about our visit
- Curriculum design to open minds, to help children to explore and arrive at their own conclusions
- Definition of the curriculum standards



VISIT TO FUCHU DAISAN JUNIOR HIGH SCHOOL

Context

- Interaction with principal, vice principal and chief teacher
- Introduction of school followed by school observation
  - ✓ "Gymnastic classes, student council meetings, music room, swimming pool"
- Observation of **club activities**
- **Presentation by student council**
- Interaction with **representatives of the student council**
- Interaction with **teacher and chief teacher**

Learning experiences

- Understanding of **the curriculum and teaching methodologies**
- Facilities provided for **sports club** and activity schedule
- Focus and importance on **Eco club activities**
- **Involvement of students** in School maintenance & management
- Sense of **belongingness & ownership** of students towards school

Day 5 Visit to ACCU, educational & cultural Sites

18/10/2019

Context

- Visit to ACCU office
- Interaction amongst Indian delegates regarding key learning
- Visit to National Museum
- Visit to Asakusa cultural sites
- Visit to Odaiba

Learning's / Experiences

- Meticulous planning, concern and care taken by each member **of the ACCU team**
- **Feedback mechanism**
- Connection **between the countries** (Japan -India) at roots
- **Advancement yet rooted in culture**
- **Reflection and sharing** of each experience and key takeaways

Key takeaway

- **Active involvement of students** & student council in school maintenance and management
- Sense of **ownership and belongingness**
- **Joyful learning** under **congenial atmosphere**
- Active **involvement of teachers with students**
- **Well developed laboratories** and library
- **Meticulous lesson planning** and execution
- Students & teachers following **punctuality & discipline**
- **Judicious use of ICT**
- Taking care of **needs of children with special needs**
- **Religion and culture** as part of curriculum
- Adequate **and well organized infrastructure**
- **Innovative way of learning English language**

Key take away

- **Improved understanding of ACCU's** efforts towards international understanding for sustainable development and peace
- Greater emphasis on **integrated education, Experiential Club** Education from class Grade 3 with desired facilities.
- Efforts made to **implement ESD practices and initiatives as a means to achieve a sustainable and peaceful society** where diversity is mutually respected.
- Optimum **utilization of available resources**

SUGGESTIONS

Things that we can impart to japan schools

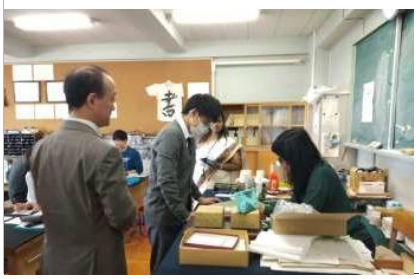
- **Collaborate with India on open and distance learning** education both in academic and vocational
- **Impart vedic mathematics** – mental mathematics
- **Introducing yoga and elderly care** as a subject.
- **Regular health check-ups** every fortnight and their documentation.

PROPOSALS TO MHRD

- Involvement **of more institutions**
- **Standardization of guidelines** for inclusive education
- Replication of **cluster school system** in India
- Provision of **skill competency as eco club** activities
- Adoption of **the teaching license system and additional certification** after ten years of teaching in India
- Strengthening of **infrastructure** in the field of sports, laboratories, vocational courses
- Thrust on **disaster risk reduction** {preparedness and mitigation

WAY FORWARD

- **Continuity** of the programme
- **Up scaling** of the programme
- **Cross learning** - let each country be a host for exchange
- **Feedback** necessary from both the countries
- **Organize** student exchange programmes for both the country
- Have **representatives of Japanese** University make presentation of Higher Education in Japan



GRATITUDE

The Indian delegation is extremely thankful and expresses its gratitude for the staff of ACCU, MEXT, Teachers and Students of Japanese educational and cultural institutions for extending such great hospitality and opportunity us. Nevertheless we thank Indian and Japan Embassy.

付録３　これまでのプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
2016 年 11 月 6 日～13 日	東京都、千葉県	14 名
2017 年 11 月 5 日～12 日	東京都、静岡県	15 名
2018 年 10 月 7 日～14 日	東京都、神奈川県、山梨県	14 名
2019 年 10 月 13 日～20 日	**東京都、千葉県**	**12 名**

計 55 名

※　2016 年度から 2017 年度は国際連合大学「国際教育交流事業」として、2018 度以降は文部科学省「初等中等教職員国際交流事業」として、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターが委託を受けて実施・運営。

文部科学省委託 2019 年度初等中等教職員国際交流事業

インド教職員招へいプログラム　実施報告書

2020 年 2 月

編集・発行　公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 1-32-7F　出版クラブビル
電話　(03)5577-2853
Email　accu-exchange_ml@accu.or.jp
URL　http://www.accu.or.jp

ⓒ2020　Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO(ACCU)